
クロサバ！

王蟲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロサバ！

【Nコード】

N2124R

【作者名】

王蠱

【あらすじ】

メジャー作品から超マイナー(?)な作品まで、作者が独断と偏見で選んだキャラ達が繰り広げるサバイバルゲーム！

プロローグ（前書き）

まずはじめにご注意をば・・・

この作品に登場する作品は基本的に作者が「面白い！」と思ったもののばかり、

つまりぶっちゃけ作者本人以外の評価が全く予想できないものばかりで

構成しております。

中には「マイナー過ぎてわかんね！」みたいな作品・キャラもあるかもしれないが

必要以上の説明はしておりませんのでそのあたりもご容赦ください。

プロローグ

吹き荒れ続ける暴風はその勢いを衰えさせる気配すら見せず、
どころか時を追うごとに確実にその力を増している。覗いた窓の外
は漆黒。

ガラスにぶつかっては流れていく雨滴は滝の真下にでも建物が立っ
ているかのような

錯覚さえ起こさせる。

ジリジリリンー！！

けたたましく鳴り響いたベルの音に気付いた彼は寄りかかっていた
窓辺から離れ、

居間に置いてある電話の受話器をとる。今時山奥の田舎でもなかなか

ご覧にならないようなダイヤル式の黒電話、そこから聞こえてきた
声は少し離れた

集落に住んでいる知人のもの。

『いやあ、本当にすごい嵐だな。うちの爺さんなんかいつ屋根やら
壁やらが

吹き飛ばんじまうんじゃないかって騒いでてよ』

「あー、そーいや俺の死んじまった婆さんも去年のこの時期

同じようなこと言ってた気がするわ。ったく、人間年取ると臆病に
なるのかねえ」

現状報告を兼ねた本当に他愛のない会話に彼らは外の惨状も少しだ
け忘れ笑い合う。だが。

『ん？なんだ今の？』

受話器の向こうの男が放った疑問のような色合いの声の意味を、だ
が彼は図りかねる。

「どうかしたのか？」

『あつ、いや・・・今なんか変な音が聞こえたような気がしたんだが・・・』

「音？」

『金属擦り合わせたみてーな、なんか耳にキンキンくるような・・・』

と、一瞬の静寂。

『ほら！また聞こえた！』

少し興奮してきたような男の声にも、しかし彼はいささか反応に困ってしまふ。

男が言うような“音”など、全く聞こえなかったから。

『なんだろうなあ？風や雨の音のわきゃねえし・・・なんか動物の鳴き声みてえな』

「・・・ま、気にするようなもんじゃねえだろ。酒でも飲んで寝てりゃ、

明日には嵐も抜けて静かになるさ。どうしても気になるならそれから原因でもなんでものんびり探せや」

長話にもいい加減飽きてきていた彼はそう言うと言話器を本体の上に置いた。

その直前、最後に電話口を抜けた「トリ・・・」という音は、

しかし彼の耳に届くことなくそのまま部屋の空気に霧散していった。

プロローグ（後書き）

次から本編^{ゲーム}開始です。

ゲームスタート

ザザッ・・・

『えー、島内のプレイヤーの皆様聞こえますでしょうか』

島のいたるところに設置された簡易式のスピーカーから流れる声に

“プレイヤー”と呼ばれた参加者たちはそれぞれの場所で耳を傾ける。

ある者は鬱蒼と茂る木々の間に身をひそめ。またある者は無人の街角に無防備に立ち。

『改めまして今回のサバイバルゲームへの参戦ありがとうございます。』

今回で第3回を迎えますこの大会が開催できましたのもひとえに・

・

バコッ！ ザンッ！ メキッ！

長つたらしい挨拶に鬱陶^{うっとう}しさでも感じたのか、3つのスピーカーがほぼ同時に破壊されたのをモニターで確認しアナウンスの男はくすり^{くすり}と薄い笑みをこぼす。

『・・・失礼。どうやら今回は前回まで以上に血気盛んな方が多いようで面白くなりそうですね』

では、と男が言うや各プレイヤーたちの顔の高さの空中に突然半透明のモニターのようなものが

出現した。そこに表示されているのは「10」という数字。

「9」、「8」、「7」、「6」・・・とだんだん減っていく、

この“大会”のスタートを知らせるそれはカウントダウン。

「5」 全員の目が画面に注がれる。

「4」 帽子の男は握り込んだ黒い物体に思わず力を込める。

「3」 刀を肩にかけた少女は意識を集中するように目を強く瞑^{つむ}る。

「2」 銀髪の男はその目に剣呑な光をのせる。

「1」眼鏡の少女は微笑を浮かべショットガンに弾を込め終える。
「0」

パアアアアアン!!!

大会開始を告げる打ち上げ花火の乾いた音が鳴り響いた。

ゲームスタート（後書き）

一話あたり1000〰から2000字くらい？で進めていくつもりです

（長くなることもあるかもしれませんが）。

次はこのサバイバルゲームの概要とルール説明。

ゲーム概要およびルール説明

ゲーム概要

作品単位で最大4人までのメンバーで行う生き残りゲーム。

最後まで残ったキャラの所属するチームには1000万円

（単位が違う世界間の作品の場合は同価値のその世界での通貨）が賞金として進呈される。

ルール詳細：

・制限時間はなく、一部の例外を除き最後の一人になるまでゲームは続行される。

・各チームには最初合計1000の「LP（ライフポイント＝生命力）」が設定されており、

これをチーム内で任意に配分。攻撃などを受けこれが0になるとリタイアとなる。

なお自分とチームメンバーの個人LPは任意にディスプレイ（後述）で確認可能。

・ステージの各所にはカード（後述）が収められた宝箱が隠されており、

これを開いて中のカードを使用することができる。

・食糧などの調達は基本各自の責任で行うこと。

・必要以上の殺傷を与えるなど危険行為と判断される行為を行ったプレイヤーはリタイアとなる。

ダメージについて・・・プレイヤーの生命活動の状態はモニタリングされており、

攻撃を受けた場合などは総合的な情報を機械的に処理することで受けたダメージを算出する。

例えば全く同じ威力の攻撃を喰らった場合でもプレイヤーAとプレイヤーBで

同じだけのLPを失うというわけではない。

ステージ：沖神島おきがみじま

太平洋に浮かぶ孤島。千葉県の一部であるが住民は数年前に起こったある「事件」以降

全て島外に移住し、現在は完全な無人島となっている。周囲5キロほどの小さな島で

その面積の大部分は森林におおわれている。

ただし無人となった町や海岸、岩場、さらに休眠状態ではあるが火山まで備えた

非常にバラエティに富んだ地形である。

カード：

ゲームで様々な効果を発揮するカード。基本的に島内に隠された宝箱から入手できる。

また文字の色により「即時発動」と「任意発動」とに分かれる。

即時発動カード（文字色は赤）・・・宝箱を開けるなど入手すると自動的に効果が発揮されるタイプのカード。

任意発動カード（文字色は黄色）・・・入手した人物が任意のタイミングで使用できるカード。

基本は1回使用すると消える。

ディスプレイ：

ゲームに関する各種情報を表示する空間投影式立体映像ディスプレイ。

“モニタ”とも呼ばれる。自分と仲間の位置やLP状況のほか、チームメンバーが所持している黄色カードの情報も記録される。

ゲーム概要およびルール説明（後書き）

長々と下手な説明申し訳ありません・・・
次からはいよいよ戦闘開始です。

始まりのR／風の街の戦士

森林エリア中央部・「仮面ライダーW」チーム

「よつし！気合入れていくぜ！」

「まあ気持ちは分からなくもないが、まず落ち着いてくれ翔太郎。せつかくの作戦を無駄にしたくはないだろう」

「フィリップの言う通りだ。少し冷静になれ」

いさめるように言ってくるフィリップと照井の言葉に左翔太郎ははしやぎ過ぎたことを自覚して

少しだけ恥ずかしくなった。3人がスタート地点として選んだのは島の大部分を占める“森林エリア”。その中でも多少高台に位置する場所。探偵という仕事柄、ある程度の情報さえあれば事前調査で最も安全にスタートを切れそうな場所くらいは見当がつけられる。

実際、この場所は周囲を

高い木々に囲まれているが周囲の状況を確認する障害となるほどではなく、

また大きめの岩などもありこちらが姿を隠すには適しているという理想的な位置だった。

「賞金1000万・・・絶対取って帰ってやるぜ」

鳴海探偵事務所ではつい最近、一つの大きめのトラブルが発生した。仮面ライダーWである

翔太郎とフィリップ、その愛車である大型四輪駆動車“リボルギヤリー”が長年の

ハードボイルドな扱いの末、先日遂にご臨終なさったのだ。

より正確に言えばエンジン、足回り、制御システムなど複数のハード、ソフトに蓄積し続けた

ダメージが臨界点を突破し、ほぼ同時のタイミングで今までの整備のやり方では

修復不可能レベルまで破損した。当然この事態に困ったのは搭乗者であるWの二人。

対ドーパント戦闘においてまさに“走る要塞”とでも言うべき防御力を誇り、

また単車“ハードボイルダー”の後部ユニット換装システムをも備えるこれを失うわけには

正直いかなかった。そこで本格的な改修費用の捻出先として二人が目をつけたのが

このサバイバルゲーム、正確にはその優勝賞金1000万円だったのだが。

「・・・にしても、まさか照井まで協力してくれるとは思わなかったぜ。サンキューな」

「・・・所長の頼みだからな。断るわけにもいかないだろう」

そう言う照井の横顔は僅かに赤い。クールさが売りの男とはいえさすが新婚、

まだまだ恥ずかしさは残っているようだ。と。

（翔太郎！）

（フィリップ、誰か来たのか？）

心中で相棒に語りかけつつ左は照井に口をふさぐジェスチャ。「声を出すな」と伝える。

照井が頷くのを確認し左は再び意識を少し離れた位置にいるフィリップに向ける。

彼らの意識は今、腰に装着されたベルト“ダブルドライバー”によってつながった状態にある。

よってこのように声を出さず会話することも、互いに見えない位置の情報を

リアルタイムで知ることできる。

（足音・・・一人、だね。多分女性・・・もしくは体重の軽い男性、かな）

落ち葉を踏みしめる音から判断したのか言う相棒に左も息をひそめ

る。足音が、近付く。

左、そして照井の耳にもその音がはっきりと聞こえた。そして、音は、止まり。

一瞬のはずの、だが体感ではその何百倍にも感じられる時間が過ぎ。ガチャッ！

「賞金、いただきい！」

3人の死角になる岩の陰から勢いよく飛びこんできたのは

黒光りする器物——オートマチック式の拳銃を構えた制服姿の少女。

「なっ、くそっ！」

「散るぞ左、フィリップ！」

「逃がすか！」

突然の銃撃にもかかわらずが戦闘慣れしたライダー3人はバラバラの方向へと跳躍、

飛んでくる銃弾を掠^{かす}ることもなくすべてかわす。

「ちっ。急所に一撃で決めて弾代節約しようと思ってたのに、まさかこんなに動けるなんて・・・」

（なんて女だよ！人の安全より弾代優先か！）

草の陰、無言のままに思う左の顔色は正直良くない。

いきなり面倒そうな奴に当たっちゃった、という感想がそこからはアリアリと伝わってくるようだ。

（翔太郎、どうする？まさかここまで早く敵が来るとはさすがに予想していなかった）

フィリップの声にも焦りの色はあるようで。左は思考をめぐらせ必死に最善の策を考え。

（・・・よし、いくぜ、フィリップ）
（分かった）

導き出した結論を躊躇もせず受け入れてくれた相棒に内心感謝し、左は隠れていた草の陰から

立ち上がる。それを見た少女——倉澤六夏の表情が一瞬困惑した、まさにその瞬間。

『サイクロン!』『ジョーカー!』

「変身!」

常の倍以上の素早さで一連の変身プロセスを行った翔太郎の肉体が変化する。

左半身を黒、右半身を緑で彩る仮面の姿へと。それを確認し六夏は

「なっ!」と動揺のような

声の一つ漏らす。それでも一瞬で冷静さを取り戻すと再度銃撃を再開するが。

「悪いな、ぜんぜん効かねえぜ」

言葉の通り命中する無数の鉛玉にも変身した“仮面ライダーW”のボディには傷跡一つ付かない。

(拳銃程度じゃ、こいつは倒せない)

判断した六夏はちらりと背後を見やる。そこに浮いていた半透明の

少女——姫笹は

名画に描かれた女神のように美しい微笑みを浮かべるとまったく突然に姿を消した。

それを見た六夏は見る者に怖気を感じさせるような狂喜的とも見える笑いを浮かべ

——だが瞳の奥だけはなぜか苦しそうな感情の色を湛^{たた}え——叫んだ。

「翠晶、シヨウダウン!」

彼女の影の色が変わった。

始まりのR／風の街の戦士（後書き）

基本1バトル2話で決着つけるつもりで書いています。

次はすぐダブルと六夏の決着・・・じゃなくて別作品キャラの戦い。何話かしたらまたこっちに場面が戻るので少しだけお待ちください。

爪研ぐ猫と意外な強敵

森林エリア北西部・「おまもりひまり」野井原緋毬

緋毬は代々の天河家に忠誠を誓う妖猫まじなの一族の末裔であり、現在は同じく天河家の末裔である優人に仕えている剣客である。そんな彼女が

なぜこんな大会に参加しているかと言うと

（若殿は鬼斬り役として生きることを決めてくれた・・・

ならば私もその力となれるよう、一層鍛錬せねば）

要するに彼女にとってこの大会はある種の修行の場であり、様々な者と戦って

力を身につけられれば良し、仮に優勝して賞金がもらえれば儲けもの、といったところなのであった。基本賞金につられてやってくる参加者が多いこの大会ではどちらかというとこのタイプのプレイヤ―は少数派で、今大会では彼女の他にあともう一人、だいたい同じような思考で参加している

少女がいるだけである（ちなみに偶然彼女も緋毬と同じく太刀の使い手だった）。

そんな彼女の頭の上で揺れる猫耳が

がさつ・・・

前方で鳴った微かな音を捉えた。彼女は反射的に本来の姿である四足獣の体勢をとる。耳を澄ませる。

「・・・よしお前ら、ひとまず周囲に注意しながら移動するぞ。

どんな魑魅魍魎ちみもろうりょうが潜んでいるか分からないからな」

魑魅魍魎あやかし、の語に思わず緋毬は声を出しかける。相手は自分のような妖の類いを知っているのか？

「先生先生！チミモウリヨウってなんですかー！？」

別の、やけにでかくて明るい声。

「魑魅魍魎というのは魑魅（＝山の神）と魍魎（＝水の神）、つまりまとめて

山川の神などを指す言葉だ。が、転じて妖怪など正体のよく分からないモノを呼ぶ時にも使う」

「ふっ、小賢しい。^{こやか}どんな相手であろうと向かってくる相手は打ち滅ぼすのみ！」

また別の声。今度もまた若い女性の声だがそこに込められた雰囲気はなぜか威圧感のようなものを

感じずにはいられない。気配は4つ。今まで声が聞こえた3人の他にもう一人、

気配は希薄だが確かにいる。対してこちらは緋毬1人。

ソロプレイヤーとして参加した彼女は分配の必要もなく1000のLPを丸ごと所有している。

ちよつとやそつとの攻撃でリタイアというのは考えにくい。

しかし相手の力量が分からない以上、迂闊^{うかつ}に攻めるのも考えもので

（4対1・・・長引かせず一撃だけ当てて離脱するか・・・）

そう決めて、動く。その刹那の前に

「はあ！」

「?!」

飛び出してきた影に緋毬は愛刀 安綱を抜き構える。相手の腕の中に構えられているのは

「・・・ずいぶんと古風な代物じゃな」

俗に種子島と呼ばれる日本で最初期に製造・使用された火縄銃だった。空いた方の手の先には

火種のライターが用意され、照準を合わせる少女——新田エリの顔には外見不相応な

不敵な笑いが張り付いている。

彼女は緋毬の本気の証、頭から生えた猫耳を視界にとらえると一度

呆氣にとられたようになったが、

「・・・は、くははははは！噂をすればなんとやら、よもや本当に人外に出会えようとは！面白い、この信長の手で直々^{じきじき}に葬って・・・」

「やめろ」

どこまでも落ち着いた声と同時に白っぽい色の粉末が少女の頭上に降り注ぎ。

「かはっ！」

直後、まるで糸が切れた人形のように膝をつく。その細腕の中にあつた火縄銃も

無造作に地面に転がった。その結果を引き起こした当人——背後から姿を現した女性は

どこか疲れたような顔で倒れた少女を眺めると

「赤城^{あかぎ}、新田を回収してくれ」

「どうかしたんですかー？」

「いやなんでもない・・・ただ降ろした信長^{バカ}がやり過ぎる前に止めただけだ」

まるで緋毬のことなど眼中にないかのように残りのメンバー

——見るからに活発そうな少女と見るからに幸薄そうな少女——に指示を出していく女性。

あまりに予想外の展開にしばらく成り行きを見ていた緋毬だったが。「っ！ま、待てっ！このまま行かせると思つか、勝負せい！」

思い出したかのように安綱の切先^{きつさき}をリーダー格とおぼしき女性へと向けた。

「ぬしがそちら4人のまとめ役であろう？私は緋毬、いざ尋常に勝負！」

気迫を込めた一声。だが女性の顔色に特に目立った変化はない。後ろの2人（一人は気絶しているので論外）も同様である。

それは緋毬の心中にわずかに恐れのような感情を芽生えさせる。

（なんじゃこやつら・・・刃を向けられて臆する気配ひとつ見せん

じゃと・・・)

それが実力の表れなのか、はたまたただの馬鹿なのか彼女には判別がつかない。

ただそんな彼女の行為をどう受け止めたのだろっ、女性は身振り手振りで残りのメンバーに

離れるよう指示した。緋毬はそれを追わない。

「・・・いいのか？逃がしちゃったぞ、あいっら」

「構わん。見る限りおぬしが一番強いであろう？それに私は一対一が一番性に合うのでな」

美しく、だがなにか毒花のような邪悪さを魅せる唇を湿らせ緋毬が言う。

対して向かい合う女性は・・・面倒臭そうに欠伸をかみ殺した。
ズルッ、と拍子抜けしそうになる緋毬だがなんとか戦闘の意思を維持。敵意を刃に乗せ、問う。

「始める前に聞いておこうか。おぬし、名は？」
それに応える女性の目はしかしほんの少しだけ真剣見の色を増していて。

「・・・木林呪理。きはやしじゅり中学教師だ。趣味と特技は・・・」
彼女の気配が、変わる。

「・・・除霊と降霊、かな」

強烈な波動に緋毬の瘦身が吹き飛ばされた。

爪研ぐ猫と意外な強敵（後書き）

祝！アニメ化！ということで「月刊少年ライバル」から

「霊媒先生」こと木林呪理と生徒3人参戦です。

雑誌の立ち読みばかりでコミック持っていないので

言動などに違和感あつたらすいません・・・

対するは「おまもりひまり」より猫侍 緋鞠。

「妖怪（オカルト？）つながり」でギャグVSラブコメ作品対決です。

似てる二人は喧嘩する

海岸エリア・南部 「銀魂」チーム&「ばんからさんが通る」剛田猛

「銀魂」チームの坂田銀時と神楽、そして「ばんからさんが通る」からソロで

参戦の無敵番長（ただし普段はただのクソ餓鬼）剛田猛は
少しだけ他のチームとは違ったスタートを切っていた。それはすな
わち・・・

「・・・にしてもよおお前なんなんだよ、なんで読み切り作品のキ
ャラがこんなところに

参加してるわけ？」

「そりゃ単純に作者の趣味じゃ。まあ連載に昇格する日も遠いとは思
えんがのお」

「てつめえ！そりゃ俺らに終われって言ってるのか！銀魂終われつ
てかオイ！？」

「現実で空知に2本連載抱えるのは編集部が許可しても無理じゃ。
毎回毎回コミックスの読者ページで

愚痴ばっか書いとる作家が他におるか？」

「一番最近苦しめたのはお前の読みきりだろうがぁ！！」

言いあう二人を少し離れた場所に座った神楽が馬鹿を見る目全開で
眺めている。

もともと作者が同じ「銀魂」と「ばんからさんが通る」（この両
作品）、それもあつて事前に

少しだけした話し合いでまずはある程度敵が減るまで協力し合おう
ということになったのだったが。

「大体テメーのキャラ設定どっかで見たことあんだよ！不良で喧嘩
強くておまけに電撃って

どこの魔王の親だ！お前みたいなのはさっさと河原でも行つて流れてきた赤ん坊にでも懐なつかれる！」

「うるさいわこの万年パーマが。わしゃこの大会で活躍して1000万、

全国漫遊番長武者修行の旅の軍資金にするんじゃ！」

「んなもん金なんぞかけずにいくらでもやれんだろーが。こっちはもつと深刻なんだよ。

社会人なめんな」

「どうせ家賃滞納とかそのレベルじゃないんか？」

ほぼピンポイントで言いあてられた銀時はぐうの音も出ない。

滞納しまくった家賃を払うため、というのが今回の彼らのこの大会への参加目的だった。

もちろん1000万円まるまる返済に充あてなくとも良いので優勝できれば

豪遊への道が待っているのは確実なのだがもし失敗した場合・・・かぶき町に帰ったあとの血祭りはほぼ確定だった。

「銀ちゃん、バンチョー、いつまでやってるアルか？」

いい加減ただ見ているだけに飽きたのか神楽が二人の方に歩み寄る。

日傘をさし立つその姿は一見すれば普通の美少女だがそこはやはりジャンプ史上初ゲロ吐いたヒロインにして戦闘民族“夜鬼”、馬鹿を続ける男どもを見る目は

路上の虫の死骸を見るそれより感情がこもっていない。

だがちよつと口を挟まれたくらいで喧嘩を止めるような二人でもやはりにく。

「ああ？テメーも混ざるんか？いいぜ、協力関係は白紙に戻すか」

「邪魔すんなよ神楽、トドメだけは譲ってやるから俺に瀕死や近くまで殺やらせる」

もう完全に最初の約束も思考の外、3人は完全な戦闘態勢をとる。

銀時は腰から引き抜いた木刀を構え、神楽は番傘の柄を握り込む。
猛はポケットの中のアイポッドの電源を入れ

『ちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっ．．．』

おニヤン子クラブ「セーラー服を脱がさないで」のメロディが流れ
ると同時にその小柄な体全体から

紫電が迸る。はじけるまるで落雷のようなその光量に一瞬目を眩ませてしま
った

銀時と神楽が再び目を開けた時に見たのは先ほどまでとはまるで別
人のように

がつしりした青年の体つきに変化した猛の姿。

「難儀なんぎな設定だな」

笑って語る銀時に。

「なーに。おニヤン子ファンとしては嬉しいだけよ」

野獣の笑みで返す猛。雷電に包まれた拳と木刀が、ぶつかる。

似てる二人は喧嘩する（後書き）

「マイナー過ぎて読者が付いてくれるか心配だな」ランクBマイナス、

空知英秋先生の読みきり「ばんからさんが通る」より
”自由を求めるいたいけなゾーマ” 剛田猛が参戦です。
読みきり作品の二次創作って大丈夫ですよ？などと
少しだけ心配になったりもして・・・

サブタイは最初親（＝作者）が同じなので「兄弟」って
言葉を入れようとしたのですがうまいのが思いつかず
原作であつたこれに・・・

次は「ダブル」対「アスラクライン」六夏、決着編です。

始まりのR／機械仕掛けの悪魔

森林エリア中央部・仮面ライダーW対「アスラクライン」倉澤六夏

六夏の影の色が変わる。一度足を踏み入れてしまえば、そのままどこまでも

沈んでいってしまいそうな暗い昏い虚無の色へ。そこから放たれた光を。

『危ない！』

ソウルサイドのフィリップがステップでかわす。直後、その背後にあったむき出しの岩、
光の魔法陣（と回避の瞬間翔太郎の目は認識した）が当たったそれが形を崩す。

「「なっ?!」」

驚く二人の目の前で元岩だったその物体は遂には完全な液体となり地面に吸い込まれていく。

『闇より刮（きざ）^{ウツリキ}きしー氷晶より出でし・・・其は科学の涙が溶かす翳（かげ）！』

呪文のように漆黒の影の底から無機質な声が響く。そしてそれに呼応するかのように影が膨らんだ

——否、その中からせり出してきた“何か”によってその全体の形を錯覚したのだ。

やがて全体を現実の空間へと転移し終えたその巨体は

「・・・ロボット？」

翔太郎の目に映ったモノ。南国の海を連想させるような美しく澄んだ翠色の鎧をまとったそれは機械人形のように見えた。その人形の右腕が淡く輝き・・・

「っ！」

それが先程岩をドロドロに溶かしたあの光と同質のものだと気付いたダブルはバックステップで距離をとる。直後に襲った再びの閃光。ワンステップ前までいた地面が数メートルの深さまで

陥没でもしたように消失した光景は翔太郎を、そしてフィリップを戦慄させるには十分だった。

『物質融解能力?!なんて無茶苦茶な威力なんだ!』

「接近戦は危ねえな・・・なら!」

『サイクロン!』『トリガー!』

メモリチェンジで黒から青へと変化したダブルの左手の中にトリガーマグナムが出現する。

サイクロントリガー

CTの異名は「疾^{はや}き狙撃手」。一撃あたりの威力は

さほどではないが不用意に近づけず、またそれなりの回避スピードが必要な今回の相手には

まずまず適している形態と言えた。

「くらえっ!」

引き金を引くダブル。銃口から打ち出された風の弾丸は狙い変わらず全弾機械人形に被弾する。

が、人形はそのたびにほんの一瞬だけ動きを止めるもののダメージを受けた様子は微塵もなく、

どころかダブルに急接近すると巨大な拳で彼らを殴りつける。

「ぐあ!」

苦悶の声を上げる二人。その横の空中に表示されたモニタには

『左翔太郎 LP 244/300』

の表示。一撃で1/6程度のライフを削られたことになる翔太郎は、しかし思考を乱さない。

むしろこの窮地だからこそより冷静に事態を見極めようとしていた。どこまでもクールに、ハードボイルドに。大切な師匠から受け継いだ探偵の心得を、

いままさに彼は実践しようとしていた。

「勝手に悪いなフィリップ。最初の作戦は……まずこいつを倒してからだ」

『ルナ！』『トリガー！』

再びのメモリチェンジ。現れたのは『幻想の狙撃手』ルナトリガー LTのフォーム。

「死なない程度に逝^いっちゃいなさい！」

どこか苛立ってきたような六夏の声に合わせたのか、今までとは比べ物にならない光量^{アスラ・マキナ}が

機械人形——機巧魔神 翠晶すいしょうの全身を覆うように展開する。

全力攻撃、といういやな言葉がフィリップの脳裏をかすめ、しかし自分の『相棒』が

未だ戦意を失っていないという事実を彼は自分の心の支えにする。

ルナメモリをトリガーマグナムに装填、特殊な可変構造の銃口の先を持ち上げ

マキシマムモードへと変形させる。

『ルナ！マキシマムドライブ！』

両腕で構え、照準を合わせ。

「翠晶、ゴー！」

六夏の悪魔への命令と。

「ルナミラージュ！」

ダブルの指が引き金を引くのは、ほぼ同時。

万物融解の光を全身にまとった巨体の突撃。どれだけ身体能力が高かろうとこれを防げる相手は

エクス・ハンドラー

元演操者くらしいのもの、と六夏は半ば以上にせせら笑っていた。だから――

「えっ？」

自分の正面、彼女が操る機巧魔神の背中からすり抜けるように飛び出してきた

金色の光弾を避けることなどよもや思考の外で。

「っぎ、ぎゃー?!」

まるでコントのように見事に吹っ飛ぶ彼女の声をダブルは勝利の鐘^{かね}として受け取った。

・・・・・・

「はっ、ここは!？」

「目は覚めたか、不良娘？」

戦闘からどれくらい経ったか、意識を取り戻した六夏は自分の身体が蔦^{つた}のような植物で

拘束されていることに気付く。目の前にあるのはさっきまで「仮面ライダーW」として対戦していた

左翔太郎にフィリップ、そして最初に襲撃を仕掛けた際に逃げられた照井竜の顔。

周囲を見回すと翠晶はとくに姿を消していた。

ハンドラー

演操者である人間が意識を失ったのだから当然だ。

いっそのことコントロールできなくなつて暴走していればよかったのに、などとも思つてしまうのは

勝負に負けた拳句こんな醜態をさらしているという現状とも無関係ではあるまい。

「君、予想だけでもうほとんどLPが残つてないんじゃないかい？銃は使つてたけど肉体自体を

鍛えているようには見えないし、対人用に殺傷力を極力抑えたとはいえ

マキシマムドライブを喰らったんだ。ソロプレイヤーでも厳しいく

らの威力だよ、あれは」

解説してくるフィリップにも六夏はふん、とあくどい笑いのまま睨みつけるという器用なことをする。その顔の隣の空間に浮かび上がるモニタ。表示は

『倉澤六夏 LP46/400』

「ちっ、本当に無いわね・・・で、あんたたちは何がしたいわけ？リタイア寸前のプレイヤーを

いびって楽しもうっての？最低」

憎々しく吐き捨てる六夏。だが翔太郎は違う、と一声。

「ここまでやっておいてなんだが・・・お前、自主リタイアしてくれないか？」

はあ？という疑問の声が六夏の喉から飛び出す。

「正直瀕死の相手に手をかけるみたいで気が引けてよ・・・」

「じゃ、じゃあなんでさっきのは何なのよ！？全力だったんじゃないの、

マキシマム（全力）とか言ってたじゃん！」

「一撃でLPゼロにするつもりだったんだよ！くそっ、出力の見極め間違った！」

なおも騒がしく言い争う翔太郎と六夏。このまま交渉するか、いつそ昏倒でもさせてリタイア願うか。そんなことを隣で思案していたフィリップと照井。

木々の間に声を響かせる彼らの頭上から飛んできた“ソレ”は

ドッ・・・グウオオオオオン！！！！

急激な爆発で周囲一帯を容赦なく包み込んだ。

始まりのR／機械仕掛けの悪魔（後書き）

オリジナルマキシマムドライブ「ルナミラージュ」。

トリガーフルバーストが一発あたりの威力が

低い無数のコントロール弾だとすればこちらは

一撃必殺の「任意物体貫通弾」、といったところでしょうか。

勝手に技作って「W」ファンの方すいません（汗）

ソウルメモリのマキシマムドライブが出したくてやった暴挙でした。

ただこれからもオリジナル技出すかもしれませんので

どうかご容赦のほどお願いします。

さて、一応決着はつきましたが最後にまた面倒事の気配。

次回はその「犯人」のお話。

爆破と黒衣と伊達男

町エリア・廃ビル屋上

「ちよつとやりすぎちゃったかしら？」

困ったような口調で言う彼女の横顔にしかし反省の色は無い。

戦車砲のような巨大な——とてもじゃないが生身の人間が持ち歩くことなど

不可能どころか想定外だろう砲身だけで2メートル以上はある重火器の照準を覗きこんだ

その眼は悪戯っ子のように無邪気に輝いていた。

赤いフレームの眼鏡に全身を覆う黒いコート。

普通に街中に立っていれば人目を引くような美女もだがこんなほとんど戦場然とした場所で、

しかも当人が全力で破壊行為をやっているところなど見れば逃げ出さない一般人はまずいない。

そう、あくまで一般人は。

「六夏会長のLPは・・・あ、やっぱり今のがトドメになっちゃった。

まあいいわ、報酬払えばあの人は文句言わないだろうし」

モニタを見つつぶつぶつ独り言をつぶやく彼女の背後からバシユツ！

（っおっと！）

飛来した金色の光弾を常人離れの間で難なく回避した少女。

確認のため振り向いた先にいたのはがっちりとした体格の男性。年齢は少女よりはだいぶ上、

20代後半から30代といったところだろうか？その腕に握られた得物を黒衣の少女は

目を品定めでもするように確認する。

メカニカルな外見の、シルバーを基調とした色合いの大型の銃器のようだ。

そんなものをいきなり、しかも背後から容赦なく撃ち放った男も男だが、それを造作もなく避けた

少女も並みの人間ではない。男の方はそんな人間離れした動きをした少女に

感心したように「へえ」と短く声を漏らす。

「あんた、なかなかやるじゃないか。さっきはそんなモン笑顔でぶっ放すし。

ただもんじゃねえだろ？」

そんなモン、と指さされた先にあつたのは先の巨大砲。

黒光りする長大な砲身に手をあてた彼女はさも愉快そうに微笑んで

「そうね・・・あなたがどこの誰だか教えてくれたら、私も自己紹介くらいしようかしら？」

言い終わらぬうちに彼女の黒衣の内側でなる「ジャコンツ！」という駆動音。

反射的に身をよじらせた男の顔の横を灰色っぽい色の塊が駆け抜けたのはそのコンマ数秒後。

「あ、あつぶねー！本当にいきなりおっぱじめるかよ？」

背後の壁にめり込んだ野球ボール大のゴム弾を確認した彼は意を決したようにその腰に

“ソレ”を装着する。手に持ったままの銃と同じようなカラーリングが施された、

やけに機械的なバツクルだ。さらに空いた方の彼の手の指には銀色に輝く小さなメダルが一枚。

「まあいいぜ。自己紹介、してもらおうじゃねえか」
チャリン！

メダルがバツクルの上部から内部に飲み込まれ。

「変身！」

ガチャ、ガチャ、カポンッ！

軽い音と共にバツクルから発生したカプセル状のオーラが男の全身を包む。

対峙する少女が興味深げに見つめる先でそれはまた唐突に消滅し。

「へえ、強化スーツ？それともパワードアーマーってやつかしら？」

「さあ？マニユアル読んでないから詳しいことはよく知らないんだよ」

男の声で中から姿を現したのはメタリックな輝きを魅せる人影。

メカの全身鎧に身を包んだ仮面の戦士がそこには立っていた。

「俺は伊達明^{おだけい}。そして仮面ライダーバースだ。よろしくっ！」

ビシッ！と明るく親指を立てるバースに黒衣の少女はやはり明るい声と表情を返し。

「黒崎朱湮^{くろきしゆい}よ。よろしく、仮面ライダーさん？」

言いざまにコートの内から取り出していた手榴弾を5 / 6発、見事な投擲^{とうてき}フォームでぶちまけた。

爆破と黒衣と伊達男（後書き）

「ダブル」チーム及び六夏爆撃犯、朱湮の姉御が参戦です。
遠隔地から仲間ごと砲撃、ってどんだけ外道？と

思わなくもないですがまあ仲が良い二人ではないですから
このくらいしますよねきっと、うん。

対するは「仮面ライダー000」より伊達さん〃バース。
これ書いてる日の放送によると医者だったみたいですね。
一億稼ぎたいのもその関係？

さて次は・・・

「おまもりひまり」VS「霊媒先生」中編

（どうしても前・中・後の3つになりそうな気配）です。

迷い猫の決意

森林エリア西部・野井原緋毬 対 「ほんとにあつた！霊媒先生」
木林呪理

（くっ、まさかあんな相手がいようとは！）

腰ほどの高さまでいつそ見事に生い茂った草木の間を必死に逃げ回りながら緋毬は

自分の置かれている状況の最悪さに表情を歪めた。彼女が先程から追われている相手は人間、

しかも本人曰く中学教師という話だったが。

（なんなのじゃあの馬鹿げた霊力は！？おまけに妖気や神気まで漂わせておる・・・

どんな化け物じゃ！）

あやかし
妖である緋毬は神気があまり得意ではなく、

たとえば神社などそれが濃い場所に近づけば力が減衰してしまう。

彼女が普段敵対する相手というのは大抵の場合同じ妖なのでそういった場所なら

相手も同様の影響を受けるためあまり問題ないのだが、今回の相手は勝手がだいぶ違った。

まず第一に生身の人間であること。以前に神や幽霊と遭遇し、前者とは実際に剣を交えた

（その時は主である優人の説得により事なきを得た）経験のある彼女も人間相手では

正直戦やりにくい。その上、である。相手は先に述べたように

彼女にとつていまだかつて想像したこともないような強大な霊的能力の持ち主。

おまけに「趣味・特技は除霊」発言を信じるなら自分の主や他の十
二家と同じような

退魔の力を持っている可能性もかなり高い。はつきり言って相性が最悪過ぎた。

（幸い足は私の方が上・・・ここは何とか逃げ切って他の相手を探そう）

珍しく逃げ腰な彼女の横に浮くモニタの表示は

『野井原緋毬 LP802/1000』

これが初手を一撃喰らっただけのダメージ。同じくらいのものをあと四発もらえばリタイアは

ほぼ確実という状況では、さすがに戦意を高く保つのは難しかったようだ。

（このまま森の中を移動して・・・）

「見つけたぞー！」

「にやあ!？」

背後を振り返った彼女の紫めいた瞳が驚愕で見開かれる。

足場の悪い森中の道、本性が獣である自分に追いつける人間などいるわけない、という慢心は

「待てええ!!」

猫耳を生やし猛烈な勢いで追いつがってくる成人女性というある意味ちよつとアレな光景で

いとも簡単にぶつ飛んでしまった。

「な、なんなのじゃ本当にお前は?!なんじゃその耳は!」

すつかり常の冷静さも失いツツコミどころまでおかしくなっている緋毬に

「んあ?なに、ちよつとスミロドンの霊を降ろしただけだ」

説明する声はやはりどこまでもマイペース。

スミロドンとは犬齒虎けんしこという種別に分類される古代の猫科生物、いわゆるサーベルタイガーのこと。その身体能力は同じ科といえど普通の猫の変化たる緋毬とは

まさに天と地ほどの差があるのは明らかなのだが。

「すみろどん？ 新手の井ものかなにかか？」

分かっていないらしい彼女はだが足を完全に止めた。一つ、深呼吸。意識して冷静さを取り戻す。

安綱を引き抜き、完全な臨戦態勢。そこにもう退く気配は微塵も見えない。

それを察し呪理も腕に力を込める。その指の先からジャキッ、と音をたて鋭い爪が伸びる。

唇からは同じように伸びた犬歯が凶悪に覗き、「ふしゃああ・・・！」と威嚇するような唸り声さえ

上げる。降霊状態にさせているスミロドンの能力をより強く引き出すうとしているのだ。

猫VS犬歯虎、時代を超えた同族対決の火蓋が切って落とされようとしていた。

迷い猫の決意（後書き）

猫耳少女VS猫耳成人女性という

ちよつとよく分からない戦闘の開幕。

木林先生「猫の王」ガザリを降霊して戦わせるか？

とかも考えたのですが残念ながらまだまだ原作で存命中のため
代わりに「戦闘力の強い猫」↓スミロドン（・ドーパント）で
思いついた苦肉の策。

いつそのこと「銀魂」から”暗黒猫耳兵器”キャサリンあたりでも
出して

サブタイを「三大猫耳超決戦！」とかにしようかなとか
少し考えたのは浅すぎる黒歴史。

次は・・・出ました、今回参戦している中で一番知名度が心配な作
品の登場。

ヒントは「三雲岳人先生」、「電撃」、「文庫化未定」、「魔法少
女（？）」。。

現在執筆中でもうちよつと時間がかかるかもしれませんが、
できる限り頑張ります！

滅魔の刃

森林エリア上空・「サイハテの聖衣」桜狩沙々羅

遮るもののない上空から島全体を俯瞰し、桜狩沙々羅は

「ひゅう！」と面白そうに声を上げた。島のあちこちで次々と起こる破壊の音。

基本的に戦闘系のゲームが大好きな彼女にとって今回の大会への参加はまさに

降ってわいた幸運という奴だった。

元々彼女たち極東自衛機構 あかまがせき 赤間関事業所の面々がこのゲームに参加することになったのは獣装巫兵 じゅうそうふへい の一人で元アイドル、

天乃羽々姫 あまのははき が莫大な自身の借金返済の手段として応募したことがそもそもの始まりだった。当初ソロプレイヤーとして参加、優勝して賞金を返済に充てるといふ

プランでいた羽々姫だったが、その目論見はさつさとあっけなく崩れ去った。

珍しく有給の申請などした彼女の行動を怪しく思った同じ部隊の年長二人がもう一人の仲間、

諜報活動などが得意な不運系忍者少女を半ば脅すようにして個人情報を手させたのだった。

で、「おもしろそう！」と思ってしまった先輩たちにこれまた脅し同然の手段をとられた

羽々姫は泣く泣く4人で参加に切り替えさせられたというわけで。

「さあて、ど・こ・に・い・こ・う・か・な」

某私設武装組織よろしく戦闘者間への武力介入（ただし目的は戦闘終結ではなく激化狙い）を企む

バトルマニアの先輩は滞空しながら一番「面白くなりそうな」目標を鼻歌交じりで探していた。

本人は楽しんでいるがやられる側にとっては厄介以外の何物でもないという

まさに悪魔的とも言えるような行動理念だった。と。

『沙々羅？聞こえるー？』

「？音々か。どうした？」

突然の通信の相手は「サイハテ」チームもう一人の厄介な先輩にしてマッドな薬剤師から。

いつものようにおっとりとしたような間延びした少女の声の背後ではしかし

「ドカアン！」とか「ズシャン！」とかいう大きな音が立て続けに鳴り響いていて。

「・・・音々、もしかして攻撃されてんのか？」

「そうなのー。それもなんかこっちの攻撃が全然通用しなくてー」

「はあ？どういうこと・・・まあいいか。とりあえず戻るから持ちこたえてろよ」

「了解ー」

緊迫感にイマイチ欠ける音々との会話を一旦切り沙々羅はモニタでマップを表示。

自分を含めたチームメンバーを表す4つの光点と名前がそこに重ねるように表示される。

「なんだよ、スタート地点からほとんど動いてねーじゃねえかあいっ・・・」

羽々姫と鳴々葉ななはは・・・ちっ、少し遠いな。はあ、メンドクせーけど仕方ねえか」

吐き捨てるように言いつつ、彼女は目標地点に向けて空を駆け出す。

森林エリア南部・「サイハテの聖衣」小揺木音々 対 ???

「まずいわ。本当にまずいわー」

文面だけで読む限りはまったくそう思えないかもしれないが、
小揺木音々こゆるぎは現在かなりの窮地だった。対峙する相手はたった一人、
しかも獲物は太刀が一振り。徒手空拳で戦うなら確かに危険かもしれないが、

聖衣シユラウドを装着した獣装巫兵の戦力なら一瞬で撃破もできる・・・と、
音々も思えたのは最初の数十秒だけで。

「っはあ！」

「！くう」

急激に眼前に迫った一太刀をかるうじて右手の鉄扇「走水」ハシリミスで受け止める。

キンツ！と金属同士が擦れ合う音がした瞬間には既に両者は互いに後退し間合いを測り合っている。

（なんなのかしら、これ？いつもよりLS249の力が弱い気がするけど・・・）
オトタチバナ

身にまとった愛機の常との僅かな差異に気付きながらも、しかし戦闘中に敵に背を向けて調整などできようもなく。

（沙々羅、まだかしらー？）

結局状況を打破するには救援の到着を待つという選択肢しかない結論付ける。

逆に言えば、この目の前の相手がどれだけ強くても二人がかりなら倒せるという自信が

彼女にはあった。

「うおおりゃー！！」

「！」

突如の掛け声に敵が顔を向けたのは上空。そこから降って、いや“落ちて”来るのは巨大な火柱。

轟々と燃え盛る火炎は容赦もクソもなく押しつぶすように剣士の頭

上に

シュパンッ

衝突する寸前、一閃の煌きを中心に真つ二つに分かれ、しかも残滓たる火炎自体がたちまち空中に霧散し消えていく。

「ウソだろ・・・!」

空中に浮かび火炎の鞭を握りしめる沙々羅の口元が驚愕に歪み。

ヒュン・・・

「! なっ、くそっ」

更に自分がいつの間にか地面に近づいていることに気付き、咄嗟とっさに彼女は

体勢を整え着地する。降り立ったのは音々のすぐ隣。相手の剣士はどういうつもりなのか、

今の着地の瞬間も全く攻撃の素振りを見せないが。

「・・・なるほど、お前が逃げられないわけだ」

「ごめんね」

謝る音々を尻目に沙々羅は自分の聖衣を軽く見やって言う。外見的な異常はない。

だが、彼女にははつきりとこの周囲の“異変”が理解できた。

「破局粒子が・・・」

聖衣こと獣装戦闘服の力の源、破局粒子の濃度が明らかに薄いのだ。(どういうことだ? なんでここだけ・・・)

先まで島の各地を飛び回って見ていた彼女だが、

少なくとも今のよう飛行に支障が出るほどの影響はなかった。

それが上空まで含めこの周囲空間だけが局所的に変調をきたしている。

自然的な現象とは到底考えにくい。と、なればもっとも怪しむべき

“原因”は

「お前・・・何かしたのか?」

そう問う沙々羅の目に焦りの色はなく、むしろギラギラと戦意に満

ちているようにさえ見える。

不利だからといって弱腰な態度でも見せたが最後、一気に攻撃・撃墜される可能性など

戦闘経験者なら考えついて当然。戦場では迷った奴から死んでいく、などいくらでも使い古された、

しかしだからこそ適切に現実を現す文句だ。

「ふっ、ちよつとだけ僕に有利な状況を創らせてもらったただだよ。本当はゆつくり待ち伏せ狙いだっただけど、まさかこんなに早く効果が実証できるとはね」

そう言つてキザっぽく笑う剣士の姿に沙々羅と音々は怖気を感じずにはいられなかった。

経験と本能が二重の警鐘を鳴らしている。こいつはヤバい、と。

『桜狩沙々羅 LP300/300』

『小揺木音々 LP131/200』

隙なくモニタを展開した沙々羅の顔が曇る。今は背後ではあはあ息を切らし始めている音々を庇って

一人戦うには荷が重すぎる。かといってこの強敵（と彼女は判断した）がやすやすと

逃走をさせてくれるとも到底考えられない。となれば、おのずと3つ目の選択肢を選ぶしか道はない。

「音々」

「なーに？」

「・・・殺さない程度に強力なのブチかませ」

返事を聞かずに沙々羅は剣士へと単身突撃を仕掛ける。

唐突なアクションにもだが剣士は握った太刀を演舞の様に流麗な所作で構え

「いけえ！」

バワァッ！

先ほどよりは幾分か小ぶりな、だがその分より高速でしなり飛来する十数本はあろうかという

火炎の鞭^{むち}を

「・・・拔刀！」

居合の一撃ですべて同時に斬り、掻き消す！

「くっそ、デタラメにも程があんだ、ろっ！？」

猛威を振るうはずだった全ての炎蛇の根元、鞭の柄を持ち喚^{わめ}く
沙々羅の懐^{ふところ}へ剣士が飛び込み

「ぐっつ！」

装甲越しに伝わってくる衝撃に耐えきれず、数メートルばかり吹き
飛ばされる。

衝突した木の表面に走った長く深い亀裂がその威力を物語る。

『桜狩沙々羅 LP 229 / 300』

「つてて・・・くそっ、容赦ねえ」

立ち上がったその眼前に光が瞬^{またた}き

「な速っ・・・」

バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ

・・・！！！！！！

「がっ！くあっ！ぶあっ！」

嵐のように延々と続く刃の連撃に沙々羅の体は飛ばされた紙きれの
如く突き上げと自由落下の

ローテーションを繰り返す。よもや格闘ゲームのハメ技みたいな光
景を

わが身で体験することになるうとは、などと彼女が考えてしまった
のは

ダメージで意識が飛びかけた影響か。 30ヒット、50ヒット、8

0ヒット・・・

『桜狩沙々羅 LP 197 / 300』

『桜狩沙々羅 LP 173 / 300』

『桜狩沙々羅 LP 145 / 300』

・・・

目減りしていくLPを感じ続ける沙々羅、そして攻撃の手を休める

気配一つ見せない剣士。

彼女たちの足元の地面が淡い紫色に光を放ったのは沙々羅のLPが100を切った数コマ後のこと。

間をおかず地上に溢れ出した光は剣士と沙々羅を包み込むように立体的に展開、

直径十数メートルほどのドーム状の光の壁となる。

「この感じ・・・結界？」

光景の意味を肌に触れてくる感触で剣士が認識した、その一拍の動きの停止を沙々羅は逃さない。

バンツ！

「！しまった！」

小規模な爆発音に視線を獲物へと戻した剣士が見たのは結界のすぐ外、

膝を抱えた姿勢で足をさすっている少女の姿。彼女が纏う鎧はちょうど

足首の辺りが焼け焦げたように変色している。

今の一瞬、シールドサクヤ聖衣MS240の固有武装たる

茨の鞭「いばら散藤」を自身の脚に絡み付かせた彼女はそのままその能力で

装甲の表面部分だけを爆破、衝撃と爆風を利用し剣撃の雨、

さらに結界からの脱出を成功させたのだった。

だが離脱の対価は決して小さくはなくて。

「くうっ！」

威力を調整したとはいえ至近距離で爆発に巻き込まれた足に走る痛みは鋭く、

すぐには立ち上がることもさえまならない。

『桜狩沙々羅 LP88/300』

表示させたモニタの表示では既にLPは3分の1を切ってしまっている。

対照的に相手はほとんど無傷。負けたくないなら・・・速攻で最大の威力の攻撃を出すしかない。

「音々え！やれえ！！」

「ええ！」

二振りにして一対の鉄扇が美しい軌道を描き出すと同時に、結界の壁が内側に爆発した。

「これはっ？！」

剣士の表情が険^{けわ}しさを増す。連続して起こる爆発は爆風も熱も伴わず、

ただ着実にドームの中心に立つ彼へと迫ってくる。

全方位からの爆発による包囲網がそこには完成していた。

外側には紫の閃光のみを漏らし続けている結界のドームを見ながら沙々羅と音々は

最低限の戦闘態勢を維持しつつも疲れたように地べたに腰を下ろした。漏れる呼吸は共に荒い。

沙々羅は戦闘の、音々は“爆縮結界”の展開による肉体的消耗と精神的疲労が原因だ。

「・・・ってか、しょっぱなからこんなに消耗戦になるなんて思っ
てなかったぜ」

「本当にね・・・」

返す言葉も短めに音々は結界に注意を向ける。彼女の十八番^{おはじ}、爆縮結界は

多層的に展開した結界を外側から連続的に爆破していくことで中央部の破局粒子——魔力を極限まで濃縮するという「破壊」の結界。

解放することで中規模都市くらいなら吹き飛ばせる威力をもった危険極まりない技を

一個人に対して使うのもどうかと思うが。

「まあ今回はもともと破局粒子の濃度があんまり低かったのもあるし、

ちゃんと手加減もしたから死にわないわ・・・多分」

「おいっ！？『多分』って何だよ『多分』て！人死に出したらさすがにやばいだろ！」

「・・・大丈夫。親戚に“自称”敏腕弁護士って人がいるから、紹介してあげる」

「勝手に自分の罪なすりつけようとしてんじゃねえ！」

しかも“自称”で“敏腕”ってなんだかおもつくそ信用できねーし！」

安堵の時間を通り越しいつものペースに戻ってきた二人は、だから
気付けなかった。

ピキツ
・
・
・
・

目の前で縮小を続ける結果。

パキツ
・
・
・
・

その表面に

ピシッ・・・!

細かい無数の亀裂が入り続けていたことに。

ガッ……シャアアアンン!!!!

┐
┐
!
?
┐
┐

破砕音と同時に意識を向け直した二人の目に映ったのは

シュ・ババババババババババババンツ！！！！

!!!!

機関砲のような速度で自分たちの体を斬りつける無数の抜刀の軌道、その残像だけだった。

「元演操者の能力・・・」

まさか概念の違う魔力にまで通じてくれるとは嬉し過ぎる誤算だったな」

『桜狩沙々羅 LP0/300』

『小揺木音々 LP0/200』

独白し、太刀を収めた剣士はゆっくりとした足取りで歩きだす。

彼女の背後では気を失った少女二人の下に白っぽい色の円形の魔法陣が出現したかと思うや、

一瞬の閃光を経てまた瞬時に消失した。その上に乗っていた二人も
るとも。

これはリタイアした選手を速やかに島外に待機してある船まで転移
させる企画者側の仕掛けだった。

「さあて。次はどんな相手に会えるかな？」

そう面白そうに呟きながら、雪原瑤すずはら ぎょうは深緑の中へと消えていった。

滅魔の刃（後書き）

「マイナー過ぎて読者が付いてこれるか心配だな」ランクAマイナス、

三雲岳人先生で電撃文庫MAGAZINE「サイハテの聖衣」より沙々羅と音々です。

対するは同作者で「アスラクライン」チーム最後の一人にして元演操者 瑤。

はつきり言って対魔力ならほとんどチートですよね元演操者は。

三雲先生の作品はどれも好きなので

構想段階ではスニーカーの「ダンタリアンの書架」も入れるか悩みましたが

ヒューイとダリアンはペアで一人みたいなもの

（ダブルの二人も似たようなものですが）なので

片方のリタイア「もう一方だけだと即リタイア、と思い今回は外しました。

さて今回はダブル編第2弾、電撃文庫の「S」とダブルが戦います。完成までどうかしばしのお待ちを。

激突するS / 少女の挑戦

灰色がかった柔らかな地面に突き立てた太刀の柄に手を置き、少女は瞑想でもするように

深く眼を閉じている。地面から伝わる熱と、風に吹き散らされる細かい砂。

研ぎ澄まされた五感を心地よく刺激し続けるそれらが、告げた。

「・・・来た」

近づいてくる複数の足音。彼女はゆっくりと目を開く。
その下から現れた瞳は地獄の業火にも似た鮮烈な「紅」。

火山エリア頂上付近・左翔太郎&フィリップ

「・・・にしても暑いな畜生、休火山じゃなかったのかよ？」

「あくまで噴火やそれに伴う災害の危険がないと判断されたレベルだからね。」

「どうやら地下での活動は好調みたいだ」

サラサラと砂のように下に流れて行ってしまうやけに足場の悪い斜面。

一歩ずつ踏みしめるようにしながら登る翔太郎とフィリップが目指すのは

この巨大な砂山——沖神山の頂上。

元々活動していた火山だというその地表のあちこちからは温泉地を連想させるような

白い水蒸気が幾筋も立ち上り、体感温度は既に平地の倍以上はあるだろう。

そんな島内でもかなり過酷な環境になぜこの二人がわざわざ立ち寄ったのかといえば。

「しかし、本当にこんなところで持久戦狙ってる奴なんているのかねえ。

待ってるうちに干からびちまいそつだ」

翔太郎の言葉にすぐ後ろを行くフィリップも自信がないのか、少しだけ困ったような顔を見せた。

六夏との戦闘直後、何者かによる襲撃（さすがに拘束されている仲間ごと狙って

大砲撃を仕掛けるような相手がいるとは誰も思わなかった）を受けた「ダブル」チームだったが、

以外にも被害は最小限に抑えられていた。言い争っていた翔太郎と六夏の後方で事態を見守っていた

フィリップと照井は頭上から空鳴りのような音が接近しているのに気付く。

「ん？」「なにっ！」

見上げた先、神々しいくらいの光をまき散らしながら一直線に近づいてくる巨大な攻撃を視認した

その後の行動は再現しろと言われてもできないくらい高速かつ適切だった。

「左、乗れっ！」

「あつ、おっ？！」

いつもの「変・・・身っ！」という“溜め”が信じられないような素早さでアクセルに変身した照井はバイクフォームに移行しながら翔太郎をかつさらい。

『アエーン！』

二人乗りではさすがに逃げ切れないと判断したフィリップはエクストリームメモリを召喚、

自身をそこに吸収させ同じく超高速で回避運動。で、残された六夏はと言うと。

「は、薄情者ー！私も連れてきなさ・・・！」

泣いているような声の最後はだが爆音にかき消され、避難に必死な誰の耳にも届かなかった。

「彼女には悪いことをしたよ。よく考えれば彼女もエクストリームに入れてあげてれば助かったんだ」
俯きがちに言う相棒に

「・・・あんまり自分を責めんなよ。リタイアってたって死んだわけじゃねえし、
謝りたきゃこのゲームが終わった後、いくらでも話す時間はあるだろ」

翔太郎は穏やかに言い、再び上方——彼らが目指す頂きを見やる。

彼ら「仮面ライダーW」チームが最初に立てた作戦。

それは“食糧などの調達は基本各自の責任で行うこと”という

このゲームのルールから思いついたもの。

『食糧など』、の部分に疑問を抱いたフィリップが大会主催者側に事前にした

質問で得られた情報から導き出した作戦だ。

このルールをより正確に文章化するとこうなる。

『食糧など“各種物資”の調達は基本各自の責任で行うこと』

つまりフィリップがした質問とは『など』の適用される範囲について。

重箱の隅をつつくようなこの質問が、だが「ダブル」チームの作戦立案の足掛かりとなった。

その名も作戦コード『TGN』。アルファベットでカッコつけた（つморいの）命名者はもちろん翔太郎。その内容とは至極簡単に説明するなら「銃器や爆発物など得物自体を消耗する相手を見つけ出し、戦闘に突入。ヤバいと思ったたらすぐ離脱」という変則的なヒット・アンド・アウェイ戦法とでも

言うべきものだった（ちなみに『TGN』とは『弾切れ狙い』の略）。

ダブル、アクセルとも風都の仮面ライダー達は基本的に消耗するよ
うな武器を用いない。

ダブルならジョーカーで格闘、メタルで棒術、トリガーの弾丸も実
体は

メモリとダブル自体のエネルギーに近く弾切れの心配はほぼ皆無。
同じくアクセルも格闘と剣が攻撃の主要パターンで多量に必要なとな
る物資は特になし。

一方、この大会に参加しているプレイヤーの中にはそういった“消
耗品”を使用する者も存在する。

先の六夏の拳銃や、彼らはまだ認識していないが遠隔地で戦闘中の
朱攄とバースが使用している

各種武器の弾丸・砲弾、エネルギー源のセルメダルなどは事前に用
意した数を使い切ってしまうえば

再補充はまず利^きかない。

つまりTGNとはそういったプレイヤーの消耗をひたすらに誘い続
け、

資源切れによる戦闘続行不可能を誘発させるという、ある意味セコ
いことこの上ない作戦だった。

で、現在。TGN作戦を狙う二人が山登りなどしているのはもちろ
ん搾取の相手

——消耗させる武器の持ち手を探してのことだった。

「僕たちがこんな作戦を思いつく以上、同じような考えに至った相

手もいるはずだよ。

それが例えば銃器の使い手で、しかも本気で優勝狙いなら……どうすると思う？」

ここに来る直前、効率を考え別行動することにした照井と別れて直後の質問に、

少し唸って導き出した翔太郎の答えは

「うーん？そりやお前、弾数に不安があるなら序盤はどっかに隠れてプレイヤーが減ったところに……」

そこまで自分で言って、彼はやっとフィリップの狙いに気付いた。

山頂まであとわずか十数メートル。道とも言えない砂の地面はその角度を徐々に緩やかなものに

移しつつある。さほど高くない山とはいえ足場は火山灰が積もり固まっただけの柔らかいもの、

時間をかけて歩いてきた疲労は確実に腰にきていた。

「……ここまで来てもし誰もいなかったりしたら、俺気絶するかもしれねえ。

疲労と心労のダブルパンチで」

なんとか疲れを忘れようとあえて冗談っぽく言ってみせた翔太郎に。

「いや……確実にいるね、誰かが」

返された相棒の声は既に真剣味を帯びていた。

「？どういうことだ」

聞き返す翔太郎にフィリップは無言で右手の指先を地面、正確にはその上に出来た窪み^{くぼ}へと向けた。浅くへこんだそれは

どうやら人工的な図形^{パターン}を描いているようで。

「靴跡……しかも新しいな」

「山頂に鎮座するダンジョンのボス様、ってところかな……いいね、ゾクゾクしてきた」

ほとんど開戦が確実な状況だというのにいつもの如く静かに騒ぎだした相棒を

翔太郎は苦笑してしばらく眺めていた。

「よお。お嬢ちゃんがこの火山のボス様かな？」

山頂にたどり着いた翔太郎の目に入ってきたのはまず皿のように滑らかに歪曲した地面にして壁。

冷え固まった火山口の縁に堆積物ふちが積もり生み出した、いつそ人工的にも見えてしまうくらい整った構造は調理に使うボウルを思い起こさせる。

地下のマグマのことまで考えるなら具材の投入されていない土鍋、と捉えた方が

似合っているかもしれない。そしてそんな鍋の中央に鎮座する鍋將軍様は。

「さあ？言いたきや勝手に言つてなさいよ」

辛辣な口調で大太刀を引き抜くや、まったくの隙なく斬りかかる。「！」

紅蓮の髪と瞳、そしてそこに宿る意志の色はまさに“紅蓮”。

太刀から解き放たれた焰ほむの熱が、翔太郎の体を貫いていく。

少女はただ無表情に、その光景を眺め続ける。

激突するS / 少女の挑戦（後書き）

電撃文庫からあのメロンパン娘参戦。

名前まだ出してませんけど。

実は原作途中までしか読んでいないので

一番キャラ崩壊が危険な参加者だったりします（汗）

で、ダブルチームは二手に分かれTGN作戦。

作戦内容に関しては言わないでください・・・

「穴ありまくりじゃん！」とか自覚してはいるんです。

ついでにネーミングセンスのなさも自覚はしてるんです。

次回は多分照井編です。

高速VS神速

海岸エリア北東部・照井竜 対 「サイハテの聖衣」 天乃羽々姫

『スチーム!』

エンジンブレードの刃から放たれる超高温蒸気の余波を受け、マンガローブのように

水面上に幹を伸ばす周囲の木々の表皮が黒く変色していく。足元でピチャピチャと跳ね続ける

海水の感触に頓着することもできず、アクセルに変身した照井はただひたすらに防御と隙の生じにくい威力の低い攻撃を繰り返すしかなかった。

「うおおおりゃあ!」

密集する木の陰から弾丸のような勢いで飛び出てきた少女にもう何度目かの体当たりをもらう。

「ぐっ、くそっ」

『照井竜 LP226/300』

トライアルでもない、通常のアクセルの装甲を通してでも伝わる衝撃は並大抵のものではない。

それがいくら高速で動いているとはいえ、小柄な少女の与えた破壊だとは

事態に直面している彼自身でさえなかなか信じられるものではない。つた。

ビュンビュンと高速度の物体が大気をかき乱す音。

動体視力やらなにやらでどうにかなるような生易しいスピードではない、

まさに“神速”と評しても遜色無いほどの弾丸を捉えることなどい

くら “加速”の記憶を宿すアクセルといっても容易ではない。

（埒があかない・・・こうなればっ！）

『エレクトリック！』

再度エンジンメモリを起動、その中に内包された“エレクトリック電撃”の力を解放した刃を

「ふんっ！」

アクセルは地面へと突き立てる！

「ぐおお！」

途端に強烈すぎる電流がアクセル自身を焼く。

ブレードを中心に波紋のように広がり続ける電流は不純物の多い海水でも十分すぎるほどに通電し、

水に触れているところから木が燃えていくという異質な光景を生み出す。そして。

「ぎゃああ？！」

バシャーン！盛大な水音を契機にブレードを引き抜くと

『ジエツト！』

爆発的な速度の一太刀を容赦なく感電し倒れ込みかけた鎧の少女に叩きこむ。

脇腹の辺りにクリーンヒットした刃の後方からは航空機の推進装置を連想させるような

苛烈な炎が業々と吹き出し、刀身をめり込ませようとす。

「くっ、離せえ！」

少女——羽々姫ははきは現状からの脱出を試みるも、斬りつけられているのとは

反対側の腕をガッチリ掴まれており逃げ出せない。

『天乃羽々姫 LP179/250』

表示したLPにはまだ余裕がある。とはいえ、このままの体勢を維持されれば

（確実に、殺やられるっ！）

焦りはしかし状況を打開する力にはも一発逆転のアイデアにも直結せず。

「悪いがこっちも仲間の為でな。ここで一気に決めさせてもらおう！」
死刑宣告のようにフェイスフラッシャーが青く輝き、

羽々姫が“危険”を理解する前にアクセルは彼女を軽く突き放す。

「きゃっ！」

思わず尻もちをついた彼女が視線を戻した先。

その仮面の戦士の手の中に握り込まれたカウンターのような機械が。
『トリアル！』

そこから発せられた声を合図に、見る間にアクセルの装甲がその色を変える。

紅から金、そして金から蒼へ。同時に全体のフォルムも一瞬前までの重厚なイメージから一転、

どこことなく身軽でスポーティーなものへと変化している。

突然の変貌にしばし口を閉ざすことも忘れた彼女の視界から

『トリアル！マキシマムドライブ！』

「くはっ！？」

戦士の姿が消え、同時に激しい連打の感触が背後から降り注ぐ。

もらった。防御できない相手を背後から蹴り上げ続けるという行為に罪悪感を覚えながらも、

照井はこの場の勝利を確信した。

超高速形体『アクセルトリアル』。

防御と一発あたりの攻撃の重さを捨てスピードと手数に特化したこの姿ならば、

たとえ相手が先のように高速移動からの攻撃を仕掛けようとしても対処は十分可能。

いやそれ以前に一度攻撃を開始してしまえば加速の隙さえ与えず撃破できる。

(7・84、7・85、7・86、・・・)

落下し続けるトライアルメモリの秒数を高速化した意識で確認し、照井はキックの速度を上げる。

少女の纏う赤い軽鎧には目立つ傷跡さえ生じないものの衝撃は十二分に伝わっているはずで、

それを証明するように少女の口からは苦悶の聲が上がり続ける。

(8・54、8・55、・・・ここだ！)

「！はあっ！」

バシユッ！

「いいやあああ！？」

そして絶叫。渾身の力をのせた最後の一撃に少女はいつそ見事なまでの放物線を描き、跳んだ。

そのまま頭からマングローブの林の中へ突入、照井の視界から完全に消えた。

「8・60、これがお前の絶望までのタイムだ」

停止させたメモリの表示を確認し、照井の両肩から力が抜けた。

急激な消耗の気配。表示させたモニタには

『照井竜 LP178/300』

(かなり減っているな。電撃が効いたか・・・)

あぶり出しの一撃は本人が思っていた以上の威力になってしまったらしい。

数字で見せられたことで改めて疲労を確認してしまった照井はモニタの表示を切り替える。

映し出されたのは1枚のカード。黄色い文字で「LP100回復」と書かれたそれはこの戦闘が始まる

ほんの少し前、彼が木の上に置かれていた宝箱から入手した任意発動カードだった。

「すぐまた襲撃される可能性もある・・・出し惜しみして負けても

悔やみきれないしな」

言って、タッチパネルの要領でカードを選択、同じく画面に表示されていた『実行』のボタンを押す、寸前。

「もらったああああ！！！」

照井の体が横方向にぶっ飛んだ。

「ぐはっ！？」

変身解除していなかったおかげで生身のそれに比べれば遙かにロ―ダメージなのだろうが、

トライアル形態も解除していなかったためとんでもない衝撃力が照井の意識を真っ赤に染める。

「がはっ、ごほっ・・・なんだ、今の、はっ！？」

吐血しながらもよろよろと立ち上がった彼の目の前に幽鬼のような剣呑な雰囲気を放つ影が一つ。

小柄な少女の姿をしたソレは一瞬だけ

ニヤア・・・

とても嫌な感じの微笑を浮かべ、消える。

「まだ倒せてなかったのか。ならもう一度！」

自身の初歩的すぎる失態によりやく気付き

『トリアル！マキシマムドライブ！』

再度高速の世界へと突入したアクセルはしかし今度こそ驚愕するしかなかった。

「な・・・に・・・！」

見えないのだ。少女の姿が。

（まさか逃げぐあ？！）

斬りつけるような破壊の威力は背後から。怯みながらも

戦闘者の反射で回し蹴りを放つアクセルだが、その足は虚しく空を

切るだけ。

（まさか・・・）

見えない敵。捉えきれない攻撃。

（まさか・・・）

彼にとつて最悪とも言える、だがこの現象の説明を合理的に説明できる考えが脳裏に閃き、戦慄させる。

（トライアルより遥かに、速い！）

事実に気付き硬直したアクセルのボディを、不可視速度の無数の斬撃と体術が駆け抜けた。

「ちよ、ちよつとムキになり過ぎた、かな・・・？」

シユラウドクシナダ

纏った聖衣AS552の封印を第五段階まで戻したところで

羽々姫は自分のしでかしたことに早くも後悔で悶々となってしまうていた。

すぐ隣には変身も解け、完全に意識を失った照井が海水に浸るように仰向けに倒れ込んでいる。

しばらく見ているとその姿は突然現れた白い魔法陣に吸い込まれ、どことも知れない別の場所に転送されていた。

「はぁ・・・賞金取りに来たってのに借金増やすことになったらどうしよう・・・」

ため息はひたすらに重く、恨めしがるような眼光で羽々姫は空を睨んだ。

高速VS神速（後書き）

「サイハテの聖衣」借金アイドル羽々姫さんが参戦。前に書いたとおり先輩方二人のせいで

いろいろご立腹の様子。ちなみに賞金の分け前まで要求されています。アクセル・・・

エンジンメモリ内包『ジェット』の能力が思い出せず
ジェットエンジンの噴射みたいになってしまいました。

どなたか原作で使った『ジェット』の技の説明をいただけないでしょうか。

次は朱湮さんVS伊達さん決着編。

じっくりしつかり書きたいので少し遅くなるかもしれませんが
よろしく願います。

武装とピンチと逆転の切り札

町エリア廃ビル屋上・「アスラクライン」黒崎朱湊 対 「仮面ライダーオーズ」伊達明

爆砕されたアスファルトは豪快に粉塵を巻きあげ二人の視界を奪う。投げ放たれた手榴弾はバースと朱湊のちょうど中間地点に着地、通常流通しているものとは

比べ物にならない破壊力の連鎖をもつて灰色の床を削り取った。

爆撃された内戦地を思い起こさせるような惨状を見せる

そんな光景の中に立っているというにも関わらず。

「はあっ！」

「せやあ！」

バースと朱湊の動きに淀みは一切なく、どこかその声は楽しそうにさえ響き渡る。

「強いねえお嬢ちゃん。俺これでも結構鍛えてんだけど、もし生身だったらかないそうにねえわ」

冗談っぽく言いながら伊達はバースバスターの引き金を引く。撃ち出された円盤状のエネルギー弾は

射線上の朱湊に高速で接近するが

パンパンパンパンッ！

それを彼女は腰のホルスターから引き抜いた拳銃で迎撃する。鉛の弾丸が命中するたび

光弾の輝度は薄れていき、最後の「パンッ」で完全に霧散した。

その見事な射撃の腕、そして攻撃を消滅させた武器に伊達は思わず「すっげ・・・」と感嘆の息を漏らす。

それを賞賛にでもするように朱湊は優雅な手つきで弾倉を交換する。

「ふふっ、そういう貴方もだいぶ強いと思うけど？」

こんなに純粹に戦うことが面白いと思えたのは久しぶり」

自分で言つて、朱湮の脳裏に記憶がフラッシュバックしてきた。ほんの数か月前までの、必死な戦いの日々。救うために戦い続け、失ってしまったもう一人の自分。

それでも未来に進む覚悟を決められたのは、可愛くていじりがいのある、

なのに時々自分なんかよりずっと強いところを見せつけてくれた仲間たちのお陰。

そんな彼らのうちの二人は、今・・・

（つと。今は感傷に浸ってる場合じゃないわね）

自嘲するように笑い、彼女は意識を目の前の現実に戻す。

バースは今のコンマ数秒の間に既に次のセルメダルを装填し終えていた。

彼の背後、屋上の縁を囲む錆びたフェンスの上で動く数体のゴリラカンドロイドが

主を応援するかのように並んでドラミングをしている。

「さてと。お嬢ちゃん、体力と弾数はまだ余裕あるか？」

「えっ」

不意の質問に朱湮は一瞬だけ言葉を詰まらせたものの

「・・・ええ、まだまだ大丈夫ですけど。お望みなら全力で撃墜しちゃおうかしら？」

「言ってくれるねえ」

気持ちよさげな声を合図にバースの手の中に新たに2枚、セルメダルが出現した。

表面にそれぞれサソリとカニの紋様を刻んだそれは後方、

攻撃の巻き添えを喰らわなそうな物陰に置いておいたセルメダル収納用のタンクから

カンドロイドが投げ渡したもの。

相手の一挙手一投足に神経を集中し朱湮は視界を揺るがさない。

「なら・・・互いに少し本気を出そうや！」

『ドリル・アーム』

『キャタピラ・レッグ』

メダルをベルトに投入したバースの右腕と足、そこに出現した器物を認識し朱湊は

「げっ！」とらしくない焦りの声を出す。

メカメカしい鎧をより戦闘的な姿に見せるように装着された巨大な円錐の刃を前方に突き出す右腕はまさしくドリル。

重厚な印象を一気に増加させる両脚はまさしくキャタピラ。

ギューイイイイイイン！

唸りを上げ始めた錐刃が猛烈な速度で回転し。

「はああああ！」

「！あつぶな」

そのまま戦車のような速度と突撃力をもって仕掛けてきたバースの攻撃を

黒衣を翻し朱湊^{ひるがえ}は回避。だが

「うつ・・・」

微かな痛み。右腕を確認したそこに見えたは大怪我という程ではないにしろ

赤っぽい断面を見せる切り傷、そしてその内側に覗く・・・

『黒崎朱湊 LP312/350』

「？どしたよ。まさか今ので一撃KOとか・・・」

「あるわけないでしょ」

モニタを閉じた朱湊の視線が数秒、バースから離される。前後左右、それに上下の全方位周囲空間。

（あの攻撃を避け続けられる自身も正直ないし・・・ここはひとまず）

脅威を悟り、それでいてなお冷静な判断分析の末に出した方策を彼女は即時に実行に移す。

「?!」

伊達が驚きの声を出す、その前にはもう朱湊は動き終わっていた。足のバネに溜めた力を一気に解放したかのような跳躍力で一挙に飛びさがった彼女が握ったのは――

「待て待て待て！少し待て！この距離でそれはさすがに・・・！」

「待たないッ」

固定してあった大型砲を回転、照準をバースに向けた彼女の手が「発射エー！」

トリガーを引いた刹那、伊達の視界は爆炎の赤に染まった。

『伊達明 LP518/1000』

「くー、痛つてえ。あんにやろ、マジ何考えてんだ？」

ふらつく頭を必死になだめながら伊達は階段を一步ずつ、気配を探るように降りて行く。

大幅に削られたLPを気にする様子も見せないその態度とはしかし対照的に全身のアーマーは

高熱量の直撃であちこち焦げたような色に変色し、時折りバチバチと電子的な火花が飛び散っている。見るも無残な姿となった愛機の姿にも、だがまだ伊達は試合を投げる気などさらさらずに。

「・・・急に飛び出してきてくれんなよ」

言葉を向けるのはしかし自分自身へと。壁にぴったりと背を付け、慎重に気配を探りつながらフロアの中を移動する。

映画やゲームでの敵施設への極秘侵入ミッションを見ているような光景だが、

当然理由なき行動などではない。

遮蔽物の多い屋内空間、突然の襲撃を心配するならこの行動はどこまでもまっとうなものだ。

爆炎吹き上がる死地。その中に光った赤い眼光に射抜かれた途端、

朱湮は自分の表情が

強張っていくのを感じ取った。たった十数メートル先、

燃え続けるアスファルトの上に姿を見せた影——その右の腕が

『クレーン・アーム』

「くっ、はあ!？」

あり得ない距離、あり得ない力で彼女の体突き飛ばした。

フェンスに衝突した彼女はすぐに体勢を立て直そうとするが

「ぐう!？な、なによコレ!」

もがく四肢に手錠のように絡み付くのは蒼いボディをくねらせる4体の電気ウナギカンドロイド。

各々の機体は朱湮の両腕・両足首にまとわりつき断続的な放電を機械的に獲物に流す。

「っ！邪魔!」

力づくで引つpegがす朱湮。だが機能を停止しない狩人^{ハンター}たちは飽きることなく

再び彼女に飛び付いてくる。それでもなお、この動く拘束具から抜け出そうともがく朱湮の耳が。

『ブレスト・キャノン』

本日何度目かの機械音声を認識、頭の中で血の気が引く音が聞こえた。

見やった先、バースの胸に出現していた砲身の内部が凶悪に輝き――

カッ!

「?!」

引き放たれるはずだったまさにその瞬間、先の爆発とは比べ物にならないほどの強烈な閃光が

二人の目を焼く。視覚モニタ越しでも痛いほどに迫ってくる光の奔流に逆らうことはできず、

伊達は強く瞼を閉じた。刹那、甲高い足音が彼のすぐ脇を通り抜け

る。

数秒後、視力を回復した伊達が目にしたのは自分一人が取り残された屋上の風景。

背後の鉄製の扉の向こうに響く靴音を追うように彼は階段を下り始めた。

1歩、2歩。一度止まって、また1歩、2歩。極力足音を殺し、むき出しになった床をバースは進む。現在のフロアは三階。もともとが入っていたのかやけに壁の多い構造のビルはそのまま死角も多く、注意力を無駄に消耗するという意味ではあまり喜べる空間とは言えるはずもなかった。その上。

「ここにも、かよ。ほんとにどんな身の上なんだ、あの嬢ちゃん？」
無造作に壁に貼り付けられた白っぽい正方形の塊。

一見すると粘土のように見えなくてもないそれを見て伊達は嘆息する。
ここのフロアだけでない、今まで降りながら確認してきた各階各所にいくつも取り付けられてあったそれはプラスチック爆弾。

「まさかこのビルごと俺を吹き飛ばすつもりじゃあ・・・」
頭に浮かんだ嫌な考えを吹き払うように伊達は首を振る。

事実として数分前まで銃撃戦をし合った仲とはいえ、さすがにいくらなんでもゲームで

そこまでするとは思えない、というか、信じたくない。信じないようにしよう、うん。と

そこまで思い至った彼の足元で

『キャッ！キャッ！』

追従していたゴリラカンドロイドたちが興奮するような声を上げ始める。

「ん？どした・・・よっ？あっ？！」

気付いた時にはもう遅く。物陰から飛び出してきた小さな影、正視も難しい矢のような速度のまま

跳ね上がった“それ”は伊達が構えていたバースバスターに飛び付いたかと思うと

『ケケケケ………!』

不気味な声を上げながらマガジン部分を無理やり取り外そうとする。

「ちょ、ちよっとお前何やってんだ!はーなーれるお!」

『ケケケケケケケ!』

つまみ上げようとするバースに必死の抵抗を見せるのは小柄な

——若干不気味な印象を抱かせる人形だった。

ハロウインのカボチャお化けをイメージさせるような丸みを帯びた頭部。

逆三角形の目と口は獲物を求める獣じみた爛々とした光をその中に灯し、おまけとばかりに

片手には赤色が良く似合いそうな手斧まで抱えていらつしやる。

さすがに手元ギリギリのところでもそんな物騒気回らない凶器を振り回されてはたまらない。

伊達はなんとかそれを引っぺがし床に叩きつけると人形の胸に銃口を密着させ、

バシユツ!

零距离で射撃をお見舞いする。

『ケ、ケケ……ケ……』

機能の停止を示すように内部から漏れていた光が数秒明滅を繰り返して消える。

「油断も隙もねえな。しかしなんだ、この気味悪い人形」

残骸となったその人形——“殺人人形”^{ワイジェット}をなんとはなしに拾い上げ

よく見れば

改めてその造形に不穏なものを感じざるを得ない。伊達はちよっただけ何か考えたようにしたあと

「……キヨちゃん!」

人形の首を傾げさせ自分の肩に乗せてみた。無論反応してくれる相手などいるわけなく。

「・・・恥つず」

ポイツ、とゴミでも捨てるようにして人形を放り投げた——その表情が凍った。

視線の先、廊下の突き当りの角からこちらに曲がって来るのは無数の・・・

「な、なんじゃありゃあ！」

兵団、もしくは軍団。そんな言葉がふさわしく思われるような殺人人形の大軍勢が

廊下の横幅目いっぱい、津波のような怒涛の勢いでバースに突貫してきた！

その手々には斧に鉋、日本刀にレイピア、ボウガン、ガトリング、バズーカロケラングレネードランチャードリル鉄パイプショットガンハンマースカ。マグナムライド。ツカーゴーク。サーベルレイ。ングハートetc・・・

とにかくありとあらゆる種類の接近・遠距離武器が満載で。

「・・・逃げるか」

伊達が遁走を決定するのに1秒もかからなかったのは言うまでもない。

ダッ！という擬音が良く似合う猛烈なスピードで背を向けたバースに

『ケケケケケケケケケケッケケー！！！！』

背後から襲いかかろうとする人形の群れ。ゾンビ映画も真っ青のホラーシーンだ。

「だああああ！怖！ついてくんなあ！」

絶叫しながらろくに確認もせず後ろにバスターを乱射しまくるバース。

数撃ちや当たるで命中はするのだがそれでも全然減る気配がない、いやどころか・・・

「むしろ増えてるううう！！！！？」

明らかに追手の量が増えていた。しかも人形の頭の上を別の人形が走ってたりどういう理屈なのか

垂直な壁や天井を走ってたりでもうこれマジで恐怖映像以外の何物でもねえ！！

「階段！階段どこだあ！」

滅多に見れない必死すぎる表情を全開に走りまわる伊達だが、しかしなぜかさっきまであったはずの階段が見つからない。上りも下りも。

「どおなつてんだよマジこれ！？くっそ、こうなったら壁突き破つて・・・」

『ドリル・アーム』

再度武装を召喚したバースの音響系センサが騒乱の中に紛れ込んだ異質な

“声”を捉えたのはまさにその直後。

「！今度は何だよ・・・」

モーションを停止した伊達の耳に直に届いたそれは

『闇より昏^くき絶望より射ゆし——』

いつの間にそこにいたのだろう、すぐ目の前にたたずむ黒衣の少女、その美しい唇から紡がれているその“声”は

『其は——』

荘厳な機械の音色を含ませて

『科学の罪に嘆く牙！』

突き出すように向けられた朱淫の右腕から放たれた魔力の奔流が殺

人形を、バースを包み込んだ。

「これでやつと一人、か・・・はあ、まさかしよっぱなから“これ”とはねえ」

笑うような疲れたような口調で朱湊が見るのは自分の右腕。ズタズタに引きちぎれた

その中に覗くのは金属の骨格や無機質な質感の腱、ワイヤや歯車。明らかに生身の人間に備わっているはずのない器官をいじくる朱湊の少し先では

リタイアになつた伊達が大の字にのびているところを転送されていく。

「バイバイ」

無事な方の左手を振る朱湊にも返せぬまま、伊達は異空間へと消えていった。

そこまで見送つて、さて、と考えるように顎に手をやる朱湊。

（ほんつとに・・・こんな早く切り札使うことになるなんて・・・トモハルの不幸体質が伝染ったかしら？）

苦笑するように考えて、しかし現実には右手はこのままでは使い物にならないと考えた方がいい。

簡単な調整はできても大掛かりな修理はいつも律都任せだったし、ましてスぺアなどあるうはずもなく。

「六夏会長もリタイアさせちゃったし・・・癩（じせ）だけどやっぱ瑤（うみ）に来てもらって・・・」

思考がそこで止まった。原因は数メートルばかり先、伊達が消えた転移魔法陣のあったすぐ隣に

転がっていた“ソレ”。

「あらっ？もしかして、これって・・・」

とても無邪気な、なのになぜかとても怖い笑みがそこにはあった。

武装とピンチと逆転の切り札（後書き）

予想以上に長文になった決着編。

ほんとはもつと戦略とか考えたかったんですけど

色々無理っぽくて断念。無念・・・

ま、全体として考えてた話の流れ的には変わってないのでいいんですけどねw

今話で一番筆がノったシーンは・・・

間違いなく人形大暴走&逃走のシーン（笑）

これも考えてなかった展開なんです

意外といけたという奇跡。

ちなみにレイハが出てますが持ち主は参戦してませんのであしからず。

他の武器については・・・分かりませんけどね（ニヤリ・・・）

最後になりましたが感想などありましたらよろしくお願いいたします。

激突するS／勝利の吹雪

火山エリア山頂・仮面ライダーダブル 対 「灼眼のシャナ」シャナ

『ヒート！』『ジョーカー！』

「ふっ！」

猛火から飛び出してきた二色の人影が放つ拳を難なく大太刀で受け止め、

少女——シャナは微塵の隙も作らず、剣先に“存在の力”を練り構成した熱量の刃で

ダブルの右肩から左腰まで袈裟掛けに切り返す。

「くっ！」「がっ！」

結果的に両サイドを同時に攻撃されたフィリップと翔太郎が同時に苦悶の声を漏らす。

（？今、声が重なって・・・？）

ステレオで聞こえてきた異なる二つの声音に気付きシャナの手首の動き、

その速度がほんの僅かに緩んだのを二人は見逃さなかった。

『翔太郎、こつちも！』

「分かってる！」

「！やらせ・・・」

策を弄する時間など与える気はないシャナの、しかし反応するより前に。

『ヒート！』『メタル！』

「変わった！？」

目を見開き驚く少女の前に出現したのは『灼熱の闘士』ヒートメタルHM。

「うおりゃ！」

気合一閃、その背から打ちつけられたメタルシャフトと

「ちっ！」

大業物『贅殿遮那』^{にえとのしゃな}が空中で激突、金属同士がぶつかり合って生じる激しい火花、そしてそんなものより遥かに苛烈を極める業火が二つの武器の表面から吹き出す！

「何よあんた！なんでただの人間がこんなモノ使ってるのよ！？」

「お嬢ちゃんこそそんな物騒なもん振り回しててよく言っぜ！」

『その細身でヒートメタルの臂力と互角とは・・・ドーパント並みの特異性だね』

興奮したように一人喋り続ける相棒はひとまず構わずにおくことにして

翔太郎はシャフトを連続で少女の腕にぶつける。

「とりあえず、暴れる子供から刃物を取り上げるのは大人の責任だな」

「?!痛っ！」

骨と神経に直接響くような打撃ダメージに思わずシャナの手から力が抜け、

握り込まれていた太刀がすっぱ抜け地面に向かって落下する。

(しまっ・・・！)

思ってたなんとか反対の腕で掴もうとするそれを。

「よっ、とお！」

バシユ！ザクッ！

ダブルの左足によって蹴り飛ばされた『贅殿遮那』は美しい弧を描いて数十メートル先の地面に

ものの見事にまつすぐ突き刺さる。まるでRPGの勇者の剣のような格好になったそれを

「っ邪魔！どきなさい！」

「あばっ?!」

頭一つ分高い所にあるダブルの顎^{あご}へとヘッドバッド（しかも爆発のおまけ付き）を決め

束縛を振りほどいたシャナが取りに走る。

『シャナ LP640/1000』

横目でちらりと自身のLPを確認したその唇が悔しそうに歪んでいく。

実力の壁、という重々しい言葉が思考の隅にチラついて見える。

（冗談じゃない・・・まだ他に誰とも戦ってないうちにあっさりやられるなんて・・・！）

常の戦いでより臨機応変に戦えるようになるためという、つまるところの鍛錬が

このゲームへの参加理由であつた彼女にとってみれば初戦敗退というのは

是が非でも避けたい禁忌^{タブー}なのだろう。

駆けつつ、彼女は自分の胸元を見やる。

いつもならそこにあるはずのペンダント“コキュートス”は今はない。

「自分一人でどこまでやれるか試してみたい」という彼女の意志を酌^くんだ

“天壤の劫火”アラストールは現在、大会側の用意した船の中で勝負の行方を静かに見守っていることだろう。

（無様なところなんて見せられない！）

言い聞かせるように思い、遂にその手が太刀を引き抜・・・こうとして宙を掴む。

「なっ、につ!？」

灼眼に動揺の気配が波紋のように広がっていく。目の前にあつたはずの自分の武器、

それが一切の前触れなしに姿を消したのだから無理もない。

『悪いね。僕たちもこの大会には本気なんだ、容赦はできないよ』
右の眼を光らせフィリップの声を響かせるダブル。振り返ったシャ

ナが認識したその左半身は

いつの間にだろう金色に変化し、左手には依然メタルシャフトが、そして右手には新たに美しい刃紋を波打たせる大太刀が――

「！いつの間に！？くつ、返しなさい！」

掻つ攫われた『贅殿遮那』。自分の半身を持っていかれたようなその光景は

彼女から冷静な思考を奪うことに図らずも成功して。

「！でかいの来るぞ、フィリップ！」

練り上げられる莫大な“存在の力”、その気配を五感でなく直感で感じ取った翔太郎は

言いながら再びメモリを差し替える。

『ヒート！』『メタル！』

ルナメタル ヒートメタル
LMからHMへとダブルが戻った瞬間

「燃え、尽き、ろおおおお！！！」

少女が腕の中に生み出した超熱量の“槍”を投げ放った！

僅かな距離の中でしかし異常な回転を見せるその穂先はロケット花火のようにダブルの胴へと直撃し

「が、ぐあ！」

『翔太郎？！』

カラン、と落下音一つ。膝を着き、火傷を負ったようになった左腕を抱えるダブル。

そのすぐ前で止まったブーツが。

「邪魔」

手加減なく胸のあたりを張り飛ばした。

「ぐはあああ！！！」

まるでダンプにでも正面衝突されたかのような異常過ぎる威力。グーよりパーの方が衝突力は強くなるというが、

これはそんな理論でどうにか説明できるレベルの話じゃない。

「かつは！」

数メートルばかり後ろに飛ばされ、遂にダブルの変身が解けてしま
う。

未だ腕に激しい痛みを奔^{はし}らせる翔太郎はなんとか立ち上がろうとす
るも

「くっ・・・そっ・・・」

張りつめていた精神力の糸が切れてしまったのか、そのまま顔から
ズボリと

灰の地面に顔を埋^{うづ}めてしまう。

「・・・勝った」

他方、勝利者のシャナはしかし盛大に喜びをさらけ出すようなこと
はせず、どころか。

（油断は禁物。まだLPが残ってるなら意識のない今のうちにトド
メを・・・）

思考し、ダブルが落とした自分の愛刀を拾い上げる。刃を自分の顔
側に向け、

「っは！」

峰打ちを思いつき翔太郎の頭へと叩きこもうとする。だが

『ギャオー！！』

「?!」

声を震わせ刃の前に飛び出した白い影。それは『贄殿遮那』の太刀
筋を弾き返したかと思うと

その勢いのままシャナの顔面へと飛びかかるうとする。

「な、なにっ?!」

事態の全容を把握できず、押されるままにシャナは回避行動。

結果として離れさせられてしまった翔太郎の前に二足歩行で堂々立
つその姿は。

「?玩具^{おもちゃ}の・・・恐竜?」

本当に小さな、手の平に乗ってしまうようなサイズの機械の恐竜。標準的な二足歩行恐竜の姿を模したそれは

『ギャオー!』

再び一声、空中に飛び上がったかと思うとその形を変え、手の内へと納まる。

気絶した翔太郎を守るように立つ、一人の少年の。

「あんた、いつたい・・・」

悔しがるように問う少女にはだが答えず、少年は腰に巻かれた赤いバツクル、

その右側のスロットへと変形した恐竜——ファングメモリを挿入。

そのバツクルが先程戦った戦士の腰にあったものと全く同じ、とシヤナが気付いた時、

少年のベルトの今度は左側のスロットに鋼色のメモリが現れ。

「変身!」

青白い、そして目を焼くような銀の閃光が少年の肉体を包み込む。

シヤナは目の前で繰り広げられる事態について、ひとまず必要以上の思考を中断することにした。
というのも

「!はっ!!!」

シユルルルル・・・

「!」

カキンッ!

ブーメランのように不規則な軌道で襲い来るのは三日月状の刃。構えた刀で撃ち落としたはずのそれはだが意思でも持っているかのように

墜落前に浮かび上がるとその主の許へと帰っていく。

「・・・」

睨みつける相手は異形の、だが見覚えのある戦士のフォーム。右半身を白、左半身を銀で飾り、攻撃的に隆起した腕と足のラインに力を漲らせる戦士は。

「初めてで使い勝手が分からない。受け止めるなら防御しておいた方がいい」

聞き方によつては挑発とも感じられるようなそれに、しかしシャナは逆らうこともなく

黒衣“夜笠”で全身を覆う完全な防御体制をとる。

反射的な、無意識の自分の行動に驚く彼女が見る先で戦士はバックルに取り付けられた恐竜の顔、その角のパーツを指で三回弾く。

「フアング！マキシマムドライブ！」

バックルから流れる声でタイミングを計るかのように、

戦士——仮面ライダーダブル フアングメタル FMは左手のメタルシャフトを両腕で構える。

ピキピキピキピキ・・・

凍り付くような音。その正体はシャフトの表面に結晶上に生成されていく無数の白い刃。

事ここに至つてようやく自分の相対する相手、

その存在の予想すらできなかった程の脅威を悟ったシャナを

「フアングブリザード！！」

抜き放たれたシャフト、そこから剥離し飛来する無数の結晶構造体が嵐の速度の連撃で貫き、削っていく。

当たっては砕け散っていく純白の結晶。

灰色がかった火山の地面を白く染め上げていくそれは、
さながら季節外れの粉雪のようにもフィリップには見えた。

激突するS／勝利の吹雪（後書き）

ダブルVSシャナ編完結編。

前にオリジナル技出して猛反省したはずなのに

今度はオリジナルフォームまで・・・

人間なかなか成長できないということでしょうか・・・

ちなみに今回の話は今までで一番文章力に不安がある話でした。

実は風邪気味で頭重いんです・・・言い訳してしまいません。

次回は投稿がもしかしたらだいぶ遅れる可能性があります。

というのも、しばらくネットが使えない場所に行く

予定が入っています・・・

パソコンは持つて行ってちゃんと書き進めますが

投稿自体はもしかしたら1か月くらい後になってしまいかもしれません。

その場合どうかご容赦のほどお願いいたします。

Nの進化／過去からの挑戦者（前書き）

追加ルール・追加設定が多くてすいません。
今回も結構怒られそうなのに・・・

Nの進化／過去からの挑戦者

森林エリア北部・赤城チナツ＆美幌素子＆新田エリ

「モツさんモツさ〜ん！なんかこんな見つけたー！！」

相変わらずどこまでもハイテンションで戻ってきた赤城チナツにやはりこちらにも常のように（幸）薄い笑みで返すモツさんこと美幌素子。

その傍らでは先ほど仲間からの思わぬ攻撃を受けて以来意識不明のままの新田エリも

白目をむきながら横たえられている。だが薄情が無邪気かあるいはただ気付かないだけか、

チナツはクルクルと踊るようなステップのままエリの上を飛び越え

ると
素子の隣に軽く着地、「えへへー」と子犬を想わせる人懐こい笑顔で両手、

正確にはその中に収められた小さな金属の箱を目の高さに持ち上げる。

「？これって・・・宝箱？」

「うん！その木の上に置いてあった！」

後頭部を掻きながら照れるように語る彼女が持ってきたのは

間違いなく宝箱——このゲームの行方を大きく左右するかもしれないカードが

封印されているはずの器物で。

「ねえねえ！これって開けちゃっていいんだよね？」

うきつきと弾む声を上げながらもうその手はフタに手をかけていて
パカッ

箱はあっけなく開かれ。

「あれっ？これって・・・」

その中に入っていた一枚のカードを横から抜き取った素子の目に「？」の感情が灯る。

緑色の文字で書かれた文面を吟味するように読んだ二人はしばらく悩むように

話し合っていたが、意を決したようにモニタを展開すると入手したばかりのカードを選択した。

彼女らのすぐ背後に浮かび上がった魔法陣から彼が姿を現したのは、それから数秒もかからずのこと。

森林エリア中央付近・左翔太郎&フィリップ

ピコーン！と独特の電子音と共に前触れなく展開したモニタに、参加者全員が驚いたように一瞬拳動を停止した。

「おいどうしたんだよ急に！びつくりすんじゃねえか」

その中の一人、先の戦闘での意識不明から回復したばかりの翔太郎が見やる自分のモニタ、

その画面の上の方に大きく表示された文字は『チャレンジミッション・スタート』。

「チャレンジミッション？なんだそりゃ？」

ルール説明にもなかった単語に疑問符ばかりの相棒を尻目に

隣のフィリップは興味深げにモニタ画面中部から下部に映し出された文章を読み込んでいる。

「なるほど・・・これは確かに・・・」

「おいフィリップ？これ一体なんなんだよ」

早々と読み終わったらしいフィリップはだが一人でうんうんと納得したように頷いたまま

解説してくれず。翔太郎は仕方なく（というほどの労力でもないが）目で文章を追い始めた。

『チャレンジミッション』

特殊カード「チャレンジカード」が使用されました。

これより島内に出現する特殊エネミー（敵）を倒した回数によって優勝時の賞金額が増加します。

エネミーは300のLPを3つ、計900のLPをもっており300のダメージを受けるとその場から逃走します。

一回倒すごとに100万ずつ賞金が増算されていき、最大で1300万円まで増額します。

ただしエネミーも攻撃してくるためリタイアさせられる可能性もあることを

くれぐれもご理解ください。

説明を読み終えた翔太郎は文意を反芻でもするみたいに数秒眺めっぱなしだったが。

「……要するに、誰かがその特殊カードだかなんだかを使った、と」

「どうやらそうみたいだね」

「で、それで敵が増えた、と」

「らしいね」

「だけどそいつを倒せば賞金も増える……」

そこまで言って翔太郎は短く一声「よしっ！」と気合いの声をいれなおす。

「上等じゃねえか。倒してやろうぜ、そのエネミーとやらを！」

疲れも忘れたようにすっかり参加意欲満々の相棒に半ば呆れつつ、フィリップは消耗したままの彼のLPを回復させるべくモニタを開いた。

森林エリア南部・雪原瑤 対 ???

樹上から飛び降りてきた人影に雪原が反応できたのはひとえに常の鍛錬の成果以外のなものでもなかった。

幅広の剣を振りかぶり、落下の速度も利用して斧のように打ち下ろされた一撃を

鞘に納めたままの太刀で受け止める。

「つくう！」

両足が地面にめり込んでいく程の重い一発を耐え抜くため雪原は歯を食いしばる。

ジリジリと鞘に喰い込もうとする刃の進行に

パキ・・・パキンっ！

木造りの鞘の全体に亀裂が走り、遂には砕け散る。

その下から現れた太刀が押してきた剣と衝突し火花を散らす。

（重い・・・なら、これでどうだい？）

「！」

雪原は自ら得物を握り込んだ腕の力を緩める。力の均衡を破られた相手は

前のめりになるように姿勢を崩しかけ、だが空いた方の手で地面を掴むとすぐさま起き上がる。

2秒にも満たないこの時間のうちに既に瑤は後方に跳躍、剣士として十分な間合いを確保していた。

「なかなかやるね。君、名前は？」

「・・・」

愉しむように問いかける彼女にしかし相手は返さず。残念そうな表情を浮かべた雪原はだが。

「ま、いいさ。君が何者であつたとしても・・・」

言いながら疾走、横を通り抜けざま肩、腕、腰と抜き身の三連撃を見舞いし

「勝たせてもらっただけだ！」

ついでとばかりに背中側から袈裟掛けに切り裂く！

「うお！？」

痛みというよりむしろ驚きの声を上げた剣士に

「ん？ようやく喋ってくれたね」

ちょっとだけ嬉しいよ。と言葉だけは明るく続ける彼女の顔は、しかし攻撃を加えたというのに酷く険しい。

自らの得物に刃こぼれがないことを一瞥で確かめながら、

雪原は今しがた感じた手応えに脅威を覚えざるをえなかった。

（こいつ、硬い・・・）

それつまり、単純な強度。一撃必殺、とまではいかずともかなりの威力を誇るはずの

彼女の太刀筋を喰らって呻くような声を出しこそすれ、剣士は傷口に手を触れようとさえしない。

剣士の全身を覆った蒼い鎧は刃の接触した箇所細かいひび割れのような痕を残すだけで

ほとんど無傷と言っていていいだろう。

先の声は不意の衝撃に対して反射的に出てしまった、という感じにも聞こえた。

つまりほとんどノーダメージ、という具合に瑤には思えてならず。

（ここは逃げるか）

その思考に辿りつくまでさほどの時間はかからなかった。剣士はこちらの動きを図るかのように

微動だにしない。不意の攻撃にも反応できるよう意識を向けつつ、瑤は左手でモニタを開くと自分のLPを確認する。

『雪原瑤 202/250』

（まだ余裕は十分あるけど・・・こいつには他のチームを潰してもらった方が・・・）

「逃げるかい？」

「えっ？」

唐突に喋り出した剣士に、雪原は一瞬呆気に取られてしまう。

「別に、逃げたければ逃げればいい。僕は君を追うつもりはないからね」

「?どういうつもりだ」

まさかこんな会話で安心させて背後から、なんて浅はかな作戦はな

いだろうが。

鎧の隙間から響く若い男の声、その真意を瑤は判じかねる。

「言った通りの意味さ。僕はこのゲームの参加者じゃない。だから勝つても負けても特に意味はない。主催者には悪いけど、相手を見逃してでも僕はこの時間を一瞬でも長く楽しみたい」

「待て。参加者じゃない、って、もしかして・・・」

「ああ。君もちゃんと見ただろ？僕は・・・」

空を仰ぎ、鎧の男はどこか哀愁を帯びた手つきで剣を肩に掛ける。

「参加者共通の敵・・・エネミーさ」

白刃の煌めきが彼の首元に迫ったのは、その言葉の終焉。

ガッ、キンキンキンキンキン・・・！！！！！！

木々に反響するように鳴り響く金属音。その発信源へと仮面ライダーダブルは走る。

「もう誰かとやりあってんのか、エネミーとやらは！」

『そういえばよく確認しなかったけど、近くに他の参加者のマークもあつたかな』

「そういうことは先に言ってくれ！」

賞金増額のためエネミー退治を決めた二人は入手していた『索敵』のカードを使用、

30秒限定でモニタに表示された生き残った参加者の名前とその位置を示す光点、その中にある『ENEMY』の文字が存外近い場所にあることを確認すると

（ついでにこの時彼らは仲間である照井のリタイアを知った）

これ幸運とばかりに即時接近を開始した。

ちなみに無防備なフィリップの身体は岩場の影にスタッグフォンとバットショットの護衛付きで

上手いこと隠してあるので、よほど運が悪くなければ一方的にやられる心配はまずないだろう。

「それにしてもまださっきの通達から5分も経ってねえってのに。いきなり遭遇した奴は運が良いのか悪いのか・・・」

そう言っている間にもぶつかり合う金属音は確実に大きくなっている。

音量だけではない。最初遠くから微かに聞きとれたキン、という響きはダブルが地を蹴ることに

徐々に鈍く、感覚も短くなっていく。

それは破壊の現場に彼らが近づいていること、

そしてその先で繰り広げられているであろう戦闘が激化していることを同時に示している。

『そろそろ近いね』

「ああ、らしい」

相棒の声に重なって聞こえるビュッ！とかシュッ！という風を切るような音

——恐らくとてつもなく鋭い斬撃音——に翔太郎は前方に意識を集中する。

もう交戦空間まで100メートルもないはずだが、破壊音は治まるどころか絶頂といった具合。

ギギギギギギギギギギギギンンン！！！！！！！！！！

どんな速度で触れさせあつたらこんな音になるのか。

もはや激突と激突の間にあるはずの“無音”が認識できない。

工業用の大型チェーンソーが火花を散らして鉄を切断する音、とても表現すべきだろうか、

とにかくやたらと鋭く荒々しく、本能的な恐怖を呼び起こされそうになる音だ。

「どんな武器使ってたよ。ホッケーマスクの怪人でも参加してん

のか？」

『今日は13日でも金曜日でもないよ翔太郎。ただこの状況で飛び込んで大丈夫かな・・・』

三つ巴ならまだしも、僕たちという乱入者に最悪タッグを組まれて2対1、って可能性も』

「な」に弱気なこと言っただ、相棒」

負の思慮の淵に沈みかけるフィリップを拾い上げるように、翔太郎はいつもと変わらない格好付けた調子で言う。

「2対1？違えだろ、俺たちは二人で一人、一人で二人の仮面ライダーだ。2対2なら、いやたとえ相手が百だろうが千だろうが、俺たちが二人なら負けるはずがねえ」

翔太郎、とフィリップが声を漏らす前に。

「さあて！じゃあいつちよやってやるぜ！」

視界を遮る草を突き抜け、ダブルはエネミーの前へと飛び込んだ。

タツクルの勢いのままにダブルが飛び出したのは、この森の中にあつて

奇妙に拓けた空間だった。広さはおおよそテニスコート程度。

生えていたのだろう樹木はみな根元近くで綺麗に切断され、

断面に年輪をさらす切り株が無数に在るだけ。

そこから上の幹や枝葉は見当たらないが、地面にうつすら積もった大量微細な木屑のようなものが

それだとしたら一体どれほどの速度で切り刻まれたのか。

「な、に・・・」

息を呑む翔太郎。ただ彼の意識を奪ったのはそんな圧倒的破壊の結果たる光景そのものではなく。

「なんで・・・」

ダブルからエネミーを挟んで反対側、倒れ伏し、得物だろう太刀と共に

光の魔法陣の中へと消えていく少女の姿でもなく。

「なんで・・・！」

ダメージの影響が変身が解けてしまったエネミーの男は
闖入者の姿を捉えると少し驚いたように肩をすくませ、懐かしむように微笑んで。

「久しぶりだね、仮面ライダーくん」

さりげない手つきでなおすスカーフには、血のような真紅のデザインがひとつ。

「なんでお前がいるんだ・・・霧彦お！！」

悲愴とも驚喜ともつかない叫びが森を震わせた。

Nの進化／過去からの挑戦者（後書き）

突然始まったミニゲーム（?）。

最初から考えていたものなのですが

ルール説明にちゃんと書いとけばよかったかも、と今更後悔。
前回に続いてダブル編になりましたが

他の所のバトルもちゃんと継続中ですのでご心配なく。

今回はこの話の後半が銀さんVS番長編になると思います。

Nの進化／悪夢は突然に（前書き）

今回最初にお伝えすべきことはこれだけです。
「ごめんなさい！」

Nの進化／悪夢は突然に

「なんでお前がいるんだ・・・霧彦お!!」

絶叫、と呼ぶにはあまりに複雑な感情をはらんだ声が大気を振動させる。

「ふむ。なぜ、と聞かれても正直僕自身もよく分かっていないんだが・・・」

顎に手を当て考え込む霧彦を凝視し、翔太郎は混乱する頭を何とか整理しようとする。

（こいつは・・・霧彦はあの時確かに死んだんだ。俺たちに風都を託して・・・）

つらい記憶に必死に耐えながら、左は思い返す。

ガイアメモリの力に侵された子供たちを救うため、敵であるはずの自分たちと共に戦った男。

自らの愛した街の風に消えていったはずの男は、しかし今現実には二人の前に姿を見せている。

『君は本当にあの園崎霧彦なのかい？まさか、NEVERの死者蘇生技術・・・？』

「残念ながら真正正銘の本物だよ。NEVERというのはよく分からないが、

まあとりあえず一種のお祭りの企画だから、ということにしておいてくれないか？」

そこまで言って彼はダブルに見せるように手の中の器物を掲げる。

少し大きめのUSBメモリに似た機械——彼の使う『ナスカ』のガイアメモリだ。

ただその形状は彼が生前（？）使用していた有機物的なフォルムからダブルやアクセルの用いるのと

同じ規格になっており、さらにその蒼い半透明のボディの内側では二つの光が瞬いている。

「エネミーのライフは300×3の計900、って説明は読んでくれたよね？」

この光はその僕の残りLPそのものだ。

今さっきまで戦ったてた子とは相打ちになっちゃって、残り2つしかないけど」

「俺たちに・・・、お前を倒せつてのか・・・？」

翔太郎の声は重い。敵同士とはいえこの男のことはよく知っているし、

相手も多分似たようなものだろう。しかも本来なら絶対に再会できなかったはずの人物である。

ハーフボイルドと揶揄される彼が戸惑うのも無理はない。だが霧彦はそんな翔太郎にも構わず。

「せっかくこうしてまた会えたんだ。悪いが、僕はやりたいうようにやらせてもらおう！」

『ナスカ！』

起動したメモリから発せられたガイアウイスパアの終わりも待たず、霧彦はそれを腰のガイアドライバーへと挿入する。

顔に生体コネクタに似たパターンが浮かび上がったかと思うや、

彼の体は青磁色の輝きを見せる鎧へと変貌する。

ナスカ・ドーパント。かつてその卓越した剣技と高速移動能力によつて

幾度も仮面ライダーと渡り合った戦士は腰の剣ナスカブレードを引き抜くと

『翔太郎！』

「つくそ！」

一切の躊躇いも感じさせぬ速度でダブルに斬りかかる！

「ぬおお！」

これを間一髪、白刃取りで受け止めたダブル、そのガードのあいた腹部へとナスカは右膝をめり込ませる。

「がつ?!」

足を踏ん張り後ろに吹き飛びこそしなかったものの、予想していなかった部位へのダメージに

刃を食い止めている腕の力が一瞬緩む。見逃さず、込める力を強めたナスカのブレードが

遂に拘束を振り切りダブルの頭部へと激突、派手に火花を散らす。

「つく、翔太郎ここは僕に任せてくれ！彼は本気だ！」

「サイクロン！」 「メタル！」

明らかに狼狽する翔太郎から体のコントロールを半ば強引に奪い取ったフィリップは

サイクロンメタル

CMにメモリチェンジ、背中から抜いたメタルシャフトで

打ちつけてくるブレードを防ぎながらモニタを表示させる。

『左翔太郎 LP198/300』

（さっき回復させたのにもう2/3を切ってる？！なんてデタラメな威力！）

「二人で一人の仮面ライダー」たる彼らでも

基本的にLPは実際に肉体にダメージを受けた側から削られていく。つまり翔太郎の体をベースに変身している今の状況なら彼の側にそれが蓄積されていくわけで。

「どうした仮面ライダー、いや左翔太郎！？戦わず負けを選ぶなんて君らしくない！」

「！っふ・・・ふざけんじゃねえ！」

ブレードが打ちつけられ引かれるその刹那の隙を見出し、シャフトを左手に持ち替えたダブルは地面を蹴り上げ。

「くそっ・・・！」

勢いのままに飛来する湿った土はナスカの頭部に命中、その視界を数秒奪う。

反射的に周囲の気配をはかった彼は上半身をひねりながら横なぎの斬撃、

おおよそのところへと刃を届かせるがしかし手応えは全くなく。

『メタル！マキシマムドライブ！』

「『メタルツイスター！』」

剣を向けたのとは全く逆、背後からその全身へと疾風を纏ったシャフトの連打が叩きこまれる！

「ぐあああああ！?!」

体中に伝わる風の感触と重く鈍い痛み。

強烈な竜巻の中で巻き上げられた瓦礫に打ちつけられ続ける感触、とても書けば

多少は想像しやすくなるだろうか。

身軽さ・スピードの『サイクロン』とパワー・防御力の『メタル』の相性は

お世辞にも良いとは言えないが、マキシマムドライブの最大出力状態なら

短時間とはいえそんな欠点を補って余りある。

純粋な得物としての重量に筋力と速度を乗算されたシャフトの破壊力は推して測るべし。

両腕を顔の前で交差させたナスカは必死にダメージに耐えているようだ、

砕け、風に舞っては落ち続ける細かな鎧の欠片が両者の足元を青磁色に薄く彩っていく。

「ぐっ……そうだ、それでいい左翔太郎！それでこそ……」

「うるせえこの大バカ野郎が！分かったよ、俺が直々に成仏させてやる！」

ふっきれたように翔太郎が叫ぶのとはほぼ同時にシャフト最後の一撃がナスカを十数メートルばかり吹き飛ばす！

「痛てて・・・成仏ねえ・・・っていうかあんまりそう言うこと言
つていいのかい？」

「はっ？なんか文句でもあんのかよ？」

『・・・』

「ん、フィリップどうし・・・フィリップー！？！」

無言のフィリップの目の色がなにやら暗い。

まるで抱えていたトラウマを刺激されたようなその表情に、ようや
く左は自分の失態に気付く。

『ははは・・・成仏・・・そうか、やっぱり僕も父さんたちのと
ころに逝った方がいいのかな』

明るく♪までつけてはいるが（変身中なので精神世界内での）その
表情は明らかに

常の彼のそれではない。

まるで某バズーカ誤射510さん（仮名・東京都）の

「俺は石頭だー！ー！ー！」前後のような顔つき・・・ぶっちゃけ
やさぐれていた。

「あー！ー！フィリップ悪い！そんなつもりは全然なくてだな・
・」

『いいんだよ翔太郎。分かってる、つまり僕が消えれば問題ないわ
けだね。』

ロストドライバー持ってきておいて良かったよ』

はい、とロストドライバーを相棒に握らせ、

彼はそのままモニタから『自主リタイア』のカードを（変身状態の
ままで）選ぼうとして。

「だからやめろっての！いまそれ使ったらリタイアなるの俺だし！
ていうか、

なんかここに来て唐突にこの小説の作風変わってねえか？！」

『いいことに気付いたね翔太郎。実は・・・』

「「実は？」」

翔太郎と霧彦、ハモつての疑問にフィリップは諦めたような笑いを浮かべ。

『作者が・・・シリアスルートはもう書けない、って・・・ギャグばっかのほうが筆が進む、って・・・』

「「はあ!？」」

『じつは今回のこの話、一回途中まで作ったのをコピー＆ペーストして書き直してるんだけど、その修正前が異様に重い話になっちゃって』

「重いって、どんな風にだよ？」

『教えたくない。どうしても気になるなら感想ページにでもその旨を書いてくれれば』

大まかな説明くらいはするらしいけど・・・』

「作者本当に何考えてんだよ・・・」

『まあこのゲームの参戦キャラもマイナーなのが多いし、何考えてんのか自分でもよく分かってないらしいよ？』

最近是三雲。斗先生にはまってラノベ買い集めてるけど』

「文庫化してない作品まで参戦させてるやがるからな。サイハテのなんちゃらだっけ？」

『参戦どころかついこの間なんか張り切ってウ。キペ。イアでページ作ったら』

管理者側からいろいろ注意されたしね』

「作者は三雲先生がオース見てるって分かっただけで満足してろ」

「おい・・・」

ズシャッ！

手に握ったブレードを杖代わりに地面に突き立て、
仁王立ちするナスカの背後にはなにやらおっかないオーラみたいな
ものが。

「一体いつまで作者の個人的な話でだらだら場を繋ぐつもりだい？
読者様が困惑しているだろうがこのストコドッコイ共があー！」

ナスカが右手を掲げると、そこにはいつの間にか一本のガイアメモリ
りが握られていた。

ジョーカーとは違う「黒」のメモリ。

青みを帯びた金属端子を備えたその本体に表示されているのは中心
から赤い「X」の文字で。

「！それは、まさかT2の・・・！？」

驚くフィリップを無視し、ナスカはそれを起動させると
今度もガイアウィスパーの発せられる前に腰のガイアドライバーへ
と挿入。

代わりに放出された『ナスカ』のメモリがまだ空中にある間に、そ
の変化は起こった。

ガッ・・・シャ——ン！！！！

ガラスが割れるような澄んだ音をあげ、青磁色の鎧が吹き飛んだ。

「っ！」

ZECT製ライダーのキャストオフのように高速で飛来するこれを
ダブルはシャフトで何なく叩き落とす。だが。

「そんな・・・まさか・・・」

先程までナスカ・ドーパントが立っていたはずの場所、今の破片の
発射元にそれは立っていた。

砂原の砂を想わせる枯れ草色カキの鎧。

巨大にして美しい琥珀色の翼は八枚。

右手にあったはずのブレードは刃が一回りほど大きくなり、メモリ用と思われるスロットまで備えている。

そんな戦士のフォルムはしかし全体的には「蒼い」ナスカの面影をしっかりと残している。

「ナスカ・エクストリーム！」

自らを鼓舞するその声に呼応するように、湧きあがった風の渦が彼を包み込んだ。

Nの進化／悪夢は突然に（後書き）

大暴走&大爆破。もう酷すぎる・・・

本当にごめんなさい、プロットどおりに上手いこと書けず

色々やってつたらなんかこんな超展開に・・・

ナスカXの登場もホントはもっとシリアスにするつもりだったのに・

・

連載として読んでいただけている方ほんとごめんなさい、

今回の話はとりあえず「あ、ナスカがエクストリーム化した」って
ことだけ

ご記憶ください。

次回はちゃんとこれで戦って決着付けさせます！

Nの進化／究極を超える！（前書き）

今回も多分コメディ回。

Nの進化／究極を超える！

「はあああああ！！！」

爆風、としか表現できないような強烈な大気の衝撃を纏った斬撃がダブルへと怒涛の勢いで向かってくる。

エクストリームで強化されたナスカブレードの刀身から噴き出し続ける乾いた風を肌で感じ、

ダブルは咄嗟にメタルシャフトを構え直す。

刹那、激しい金属音。高速で接近したナスカの刃の太刀筋はだが一直線で、

ダブルはこれを難なく受け止めはじき返す。が。

キユイイイイ……ンンン！！！！

「？この音は……なっ！？」

耳鳴りのような本当に微かなその音を認識したコンマ数秒後、得物を握るその両腕に裂傷が走った。

「くっ……どうなつてやがる？」

翔太郎は怪訝な声を漏らしつつ、傷口の様子を一瞥し判断する。

無数に付けられた細かい傷はどれも大して深くはないものの、ダメージを受けた際の感触は相当に鋭いものだった。

だが彼が最も困惑したのは負傷自体ではなく、むしろ。

（こいつ、今どうやって斬ったんだ？）

得物を触れ合わせてからダメージを受けるまで僅かに、だが確実に在ったタイムラグ。

それが左の思考を困惑させる。傷口が開くタイミングで両者の距離は十分に離れており、

仮にナスカの高速移動を使ったとしても移動や実際の攻撃動作が全く見えないというのはいくらなんでもおかし過ぎる。

「エクストリームの効果？・・・いや、なら今彼がまだあそこにいるわけがないし・・・」

弾き飛ばされたナスカはその位置で悠然と構えたまま、ダブルの出方を待っているかのように佇んだまま。

フィリップの考えるようにもしナスカが高速移動以上のレベル、例えば不可視レベルのスピードを手に入れているのだとしたら彼らは連続攻撃で今頃とつくにリタイアさせられているだろう。

（フィリップ、あの技の正体検索できないか？）

「一応やってみるけど・・・キーワードが少なすぎる。せめてもう2、3回観察できたら・・・」

「どうしたんだい？さっきから動きが止まっているよ！」

「『！』」

足裏に発生させた気流に乗るように急接近したナスカ、その渾身の蹴りをステップでかわし、

「！つならこれで！」

「ルナ！」 「トリガー！」

シャフト マグナム
棒から銃に持ち変えるや否や
ルナトリガー

LTは淀みない動きで引き金を引き絞り無数の光弾を連射する。

「く・・・！」

体技を外され片足立ちの状態のナスカへ殺到するエネルギーの塊たちは

楽々とそのバランスを崩すことに成功、前のめりに倒れ込みかけるそこに

追い打ちをかけるべく初撃で使用されず空中を旋回していた残弾が背中へ、肩へ、腹へと

次々命中していく。だがそれらは枯れ草色の表面に見えないほどの傷を付けるだけに留まり。

「く・・・分かってるんじゃないのかい仮面ライダー？」

今の僕にこの程度の攻撃が通用しない、ってことは「

起き上がろうとする度にぶつかり続ける衝撃にも慣れてきたのか、

そう語るナスカの声はまるで何かを期待しているような響きを含んでいて。

「そろそろお互い本気の勝負と行かないかい？」

「・・・OK」

翔太郎の声で言い、ダブルはドライバーから二本のメモリを取り外すと。

『サイクロン！』『ジョーカー！』

何度目かのメモリチェンジ、サイクロンジョーカーCJとなったそのベルトから

二筋の光が空へと伸びた。一方は紫、もう一方は緑のそれが行きつく先を見上げたナスカは

そこに滞空する鳥型の機械を見た。

鳥——エクストリームメモリは光線を誘導路として滑り降りると閉じられていたドライバーに接続、

神々しい光を放ちそれが展開されると同時にダブルの姿が今までとは違う変化を起こす。

黒の左。緑の右。その中央を押し広げるように現れたのは美しく白く、

無限の色をそこに内包し放ち続けるプリズムのライン。

「そうか。それが君たちの最強の姿か・・・」

感嘆の声を漏らす霧彦に仮面の下、翔太郎はニヤリと笑いで返し。

「さあて、じゃあ本番と行きますか！」

二つの足音が地を蹴ったのは、全くの同時。

「ハアアアア！！！！」

「おおおお！！！！」

木々の高さを遥かに超えた文字通り“空中”、

二つにして三人の影が交錯するたび、その闘気にでもあてられたかのように

無数の羽音を残し鳥たちが飛び去っていく。

『翔太郎、右!』

「分かつてるっ!」

ギンっ!

振りかざしたプリズムソードにぶつかる硬い感触。

原因を見やれば彼らの中央を彩るのと同じ無限色の刀身に無骨な銅色が食い込もうとされていて。

「軽い!」

「くそっ!」

手首の動きだけで振りほどかれたのがショックだったのか、珍しく吐き捨てるような言葉を放ちつつナスカは

背面の琥珀の翼を羽ばたかせるとほとんど直角に急上昇、雲に隠れてしまうくらいの高度まで上昇して。

『まずい!翔太郎、地上に降り・・・』

その行動の意味するところを察し、しかし説明する時間はあまりになく。

「ハアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!」

「『!』がああああ!!!!」

天空から降り注ぐ嵐の柱。

その中でひととき強く速く、鋭く重い一撃がダブルを襲う!

足場に使っていたプリズムシールドに仰向けに押し付けられたその腹部には幅広の刃の切っ先。

その柄の頭をそろえた両足で押し込もうとするナスカの翼は自身の生み出した大風になびき、

ついではかりにそこから零れた空気の渦が

カマイタチ現象となってダブルの体表を削ろうとする。

先の謎の時間差切断もこれが原因か、と推測仕掛けるフィリップの意識が

『ぐああ!』

自身の上げた痛みの声に中断される。

「フィリップ、大丈夫か!?!」

『あ、あなんとか、ね』

互いに必死に痛覚からの刺激に耐えようと声を掛け合う二人だが、敵の刃と自分の盾の板挟みのこの状況ではほとんど身動きが取れない。

反撃して隙を作ろうにもこの攻撃の開始、竜巻の先端が直撃した衝撃で

プリズムソードは取り落としてしまっていた。

強化されたナスカブレードの長さは軽く大人の背丈ほどはあり、刃の先にいるダブルが徒手空拳でちょうど真逆、柄の先端のナスカに攻撃するには

リーチが絶対的に不足している。そして。

「これで・・・終わりだ！」

ナスカの両足が金色の輝きを放ったかと思うや、空衝く竜巻は遂に地上へとその根を下ろした。

逃げ惑う地上・樹上の小動物の頭の上を無残に碎け散ったプリズム色の盾の破片が飛んで行く。

「・・・以外に、あっけなかつたな・・・」

心地よい疲労感に襲われながらナスカが見上げる空は雲ひとつないまさに快晴。

彼が引き起こした突発的にして強大無比な竜巻に近くのもものは吸い込まれ霧散し、

遠くのもものは吹き飛ばされた結果の光景。

霧彦は変身を解くのもしばし忘れ、自分が作り出したその景色をただただ眺める。

T2エクストリームの代わりに彼の手の中に戻っているナスカメモリの中、

輝く光はいつの間にかあとひとつにまで減っていた。

そのひとつももうほとんど消えかけ、風前の灯火という表現がぴた

りな弱々しさで。

「相討ちか・・・ま、彼らを相手に一回分やられただけというのは結構すごいことなのかもしれないが」

自分で言っていて、しかし彼の心中に吹くのは寂しさにもよく似た気配の虚ろな風。

互いに全力で戦ったことに悔いなどあるわけないし、こんな形とはいえ決着を着けられたことは

正直うれしい。だがこのゲームが終わるまでの間、

自分を満足させてくれる相手が果たして他に現れてくれるだろう、う、か・・・？

「んっ？」

不意になにかよく知った気配を感じた気がし、霧彦はもう一度空を拝んだ。

つい先ほどとなんら変わらない見事な青空。太陽の光も眩しく、思わず目を細めかけたナス力は。

「ん！？」

何かを見た、気がした。鎧越し、目を傷めぬよう直視せず眺める太陽に重なって何かが動いている。

色も形も大きさも詳しく測ることはできないが、

ひとつだけ分かったのはそれがまっすぐ自分の方へと落下してきていることで・・・

「な？！あつ、あつ、あーーーーー！！！」

間抜けな声を上げる彼を意趣返しとばかり渾身の落下エネルギーを追加したライダーキックで

地面にめり込ませ、そのまま何事もなかったように

横に飛び退いた黄金色の落下物は変身を解く。

「悪いな霧彦。だけど勝負つてのは最後まで油断しないやつが勝つんだぜ？」

頭までめり込んで到底声など聞こえないだろうに、
わざわざ説明する翔太郎も今ばかりは人が悪い気がする。

彼の背後から重なるように姿を現したフィリップは対照的に
かがみ込むと埋まるナスカに両手を合わせる。

「・・・き、きみたち・・・無事だった、の・・・？」

身も心もロボロボだよ、とでも言いたげな声が地中から聞こえ、二人は顔を見合わせ苦笑した。

プリズムシールドが破壊され空中に投げ出されたダブルだったが、
渦巻いていた風のエネルギーを吸収、
サイクロン・ジョンド・カクストリーム
CJGXになるとそのまま飛翔、

タイミングを見計らってスーパーライダー日輪キック（by仮面ライダースーパー1）を

お見舞いしたわけだった。

「というわけで霧彦、この勝負俺たちの勝ちだな」

「・・・ま、仕方ないか」

よっこいせ、とようやく地面から這い出た霧彦はいつのまにか変身が解けていた。

「随分とあっさりした敗北宣言だな？」

「そりやここまでコテンパンにやられちゃねえ。」

ま、知り合いにはやっぱり頑張ってもらいたいし応援してるよ、
『霧彦の部屋』で」

「お前そのネタ分かんない人も多いと思うぞ？」

拍子抜けしたような翔太郎に霧彦はだが突然真面目な顔つきになり。
「ところで左翔太郎にフィリップ、この島が無人島になった経緯を知っているかい？」

「？なんだよ藪から棒に。そりや詳しく聞いちゃいねえけど・・・」

「このサバイバルゲームにはなんの関係もないだろう？」

「そうか・・・やっぱり知らされてないのか。主催者め、何を考え

て・・・」

「おいまさか何かあんのかよ、この島」

何やら一人ぶつぶつ言う霧彦の様子に不穏なものを感じ取り、翔太郎は尋ねる。

「ま、あるというかいるというか・・・」

「いる？殺人鬼が何かが逃げ込んでるとかかい？」

「おいおいだとしたら危ねえにも程があんだろ。いくらなんでもそんなところでゲームなんかやるわ、け・・・」

ないよな。と軽く同意を求めようとした霧彦が全力で顔をそらした。

「なあ霧彦。ここマジなんかいるわけ？殺人鬼的ななにかが」

応えは下手くそな口笛。なにが誤魔化す気まんまんとしか見て取れません。

「霧彦く〜ん！？なに、何隠してんのお前！？」

「ちよ、翔太郎少し落ち着いて！」

錯乱する相棒をフィリップは必死になだめる。仮面ライダーとはいえ人は人、

なまじ異形の相手と戦いなれているからこそ生身の殺人鬼に襲撃されるというシチュエーションは

想像するだに鳥肌ものなのかもしれない。

霧彦の胸倉を掴んだ翔太郎はガクガク揺さぶりながら教えるように言い募るが

当の霧彦はイタズラを仕掛けた子どもみたいな顔のまま。

「大丈夫、君たちなら何とかできると信じてる」

ポン、と左の肩に手を乗せた彼の頭の上にはいつの間にもやらの天使の輪っかが浮かんでいて。

「大丈夫ってなんだよ大丈夫って？！分かってることあんなら全部話せよお！」

気になりまくりの情報を聞き出そうと追いつがる翔太郎の健闘もだが空しく、

純白の羽をパタパタ羽ばたかせ霧彦は空へと昇って行く。

その表情が見えなくなる直前、最後にフィリップが読唇術で読み取った

「トリ」だか「ホリ」だかの音の意味が分かる者は、
少なくとも今この島内に残った参加者の中には一人もいなかった。

Nの進化／究極を超える！（後書き）

ナスカXを出したかっただけ、とぶっちゃけちゃう
今回までの3話でした。

オリジナルで大技は描写が難しい！とマジで痛感。

ナスカXの出した技は分かりにくいですが・・・

そうですね、絵としては「仮面ライダー spirits」でzxが

ジゴクロイドにライダーきりもみシユート↓

その上乘ってゼロ距離zxキック、みたいな感じでしょうか？

直接乗ったんじゃないくナスカは剣で腹抑えつけてですけど。

基本ああいった感じの落下技？です。

雷と猫

「おおおおお！！」

疾風。

「はああああ！！」

迅雷。

振るわれる剣圧にまき散らされた細かな白砂、それが目障りだとも言うように

貫き蹴散らすのは白に限りなく近い紫光の柱。

バチバチと音を立て零れ落ちる雷の断片を握り込み、

砂地を蹴った勢いを殺さぬまま猛は右拳を銀時の左脇腹へと叩きこむ！が

「！なんじゃとお！」

「へっ。筋は悪くねえが、まだまだ甘えな番長さんよ？」

木刀の刃でそれを受け止めた銀時は余裕たっぷり、といった表情のまま

距離を詰めた猛の足を軽く払う。

「つとつとと・・・」

バランスを崩しかけた番長が思わず片手を地面に付きかけ。

「あぶなっ！」

「うっお！？」

空いた方の手を空中に掲げると雷電を放出、追い打ち狙いの銀時をけん制し足の動きを止めさせた。

このタイミングを逃さず猛は体を起こすと逆の腕から再度放電、轟々と音を立てる大電流が光の奔流となって銀時の全身を包み込む。感電か、もしくは火傷か。

どちらにしてもこれで相当量のダメージを受けるはず。そう確信した猛をだがあざ笑うかのように

「嘘じゃろ・・・」

さも当然、とでも言いたげに平然とそこに在る銀髪の侍。

「痛てて・・・なんだよあんちゃん、なかなかパンチの利いた喧嘩できるじゃねえか」

今度はこっちが行くぜ。その場の空気が凍り付くような圧倒的な気配が

銀時の研ぎ澄まされた双眸から解き放たれ

「うおおおおお！！！」

密かに溜めていた力を脚力に全て変換、縮地法並みの速度で距離を詰めた銀時は

打ち上げる動作で猛の顎を砕きにかかるが。

「このくそ天パがあああ！！！」

ぐツ！と迫る木刀の剣先を拳で握り込み動きを止めるや、

焦りの色が浮かんだほんの一瞬銀時の腹へ電気加速された鉄拳が突き刺さる！

「ぐあ！」

「どーじゃい？わしの本気の拳骨、ちつたあ応えたか？」

胃の中身をシェイクされるようなこの上なく不快な感覚に襲われながら、

しかし銀時は汗まみれの顔で苦しそうに笑う。

「さあてね。馬鹿力だけならうちの神楽と同じくらい、ってところか」

「負け惜しみのつもりなら見苦しいのう。さっさとリタイアでもなんでもしたらどうじゃ」

「だれがするか、よっ！」

「がっ？！」

自棄やけのように放たれた膝の一撃が威力のままに密着していた二人の体を引き離す。

意趣返しとばかり、腹部に残る重い痛みにも猛が目を閉じたコンマ数秒。

「はああああ！！！！！！！」

ドっ！ガッ！キンっ！ジュバババババ・・・！！！！！！！！！！

打撃、刺突、斬撃、そして連撃。大人げないほどに熾烈な速度で繰り出され続ける攻撃の手に、遂に猛は自分の意識が消えていくのを感じ取ってしまった。

「ったく、クソガキ一人に随分手間取っちゃったな・・・」

一人残された砂浜、打ち寄せては返す波に溶かし込めるかのように銀時はため息をひとつ。

既に得物の木刀は所定位置たる腰のベルトに差し込まれ、まるで先の戦闘などもう忘れたように盛大に欠伸を漏らす。

「神楽の野郎も勝手にどっか行っちゃまうし、どうしたもん・・・」
ガサッ

「！」

思案最中の耳に入る草音。咄嗟に剣を構え直した銀時は足を軽く開き短く深呼吸、淀みなく意識を集中し。

「・・・神楽、か？」

ザッ！！

言い終わるか終らぬかのうち、銀閃引きながら飛び出してきた少女の刃が彼の首へと伸ばされる。

「いきなり何すんだよ嬢ちゃん。最近のガキはマジで駄^{シッコ}がなってねえみてえだな」

反射でかわしてなお命を取らんばかりの勢いで追いつがろうとする刃を得物で受け止めながらも

銀時はつとめて軽く言う。彼の木刀が受け流す鉄の刃、それを握り込んだ少女は

驚きと悔しさを滲ませたように歯を食いしばる。

その頭上で揺れる猫耳もどこか不愉快そうにビクビクと細かく震え

続けている。

「なんだよ嬢ちゃん、コスプレで相手の戦意削ごうって作戦か？

だったら運が悪かったな、俺は猫よりバニーの方が圧倒的に・・・」

「違うわたわけ！これは真正銘本物じゃ！」

憤慨する少女——緋毬は感情に正比例するかのように手に込める力を上乗せしていくが。

「本物、ねえ？じゃ、ふー」

「うみゃ?!」

斬り結ぶ刃の隙間から吹きこまれた銀時の吐息は緋毬の耳に直撃、敵対者の予想外のアクションに情けない声を上げた緋毬は顔を真っ赤にすると

「い、いきなり何をするか!?!」

「いや本物だったらこれで怯むかな、って」

勝負とはいえあんまりな態度。緋毬は馬鹿にされた気がしてならず

「く、この大馬鹿者があ！」

「!」

羞恥から軌道の乱れた剣線の一つが銀時の頬を抉った。

一筋流れ落ちる赤い血が足元の砂地に湿った斑点を描き出す。

(・・・近すぎるか)

間合いを間違えた、と事ここに至ってようやく判別付いた銀時は数歩後退、

ちようど同じタイミングで緋毬も離れ、両者の間に5メートルほどの距離が開く。

得物のリーチは互いにほとんど大差ない。

一歩踏み出し、切り込む動作をすればほぼ確実に届く間合いだ。

だが両者ともに動かない、いや動けないのは

恐らく相手と自分の力量の差を測りかねているせいだろう。

寸前までの一見馬鹿げたやり取りの間にも汲み取った相手の挙動の一つ一つまで考慮の材料として

(今)

（だ！）

踏み出し、振るうタイミング、そして剣速。全てがほぼ互角の二刃がぶつかり合った。

雷と猫（後書き）

戦闘描写がスランプ状態の今日この頃。

やっとこさ参加者の数も減らしてきたので

次あたりから新展開に行こうかと構想しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124r/>

クロサバ！

2011年5月15日11時40分発行